＜論文（外国経済論）＞

西ドイツの韓国人炭鉱労働者（Ⅰ）
Korean coal miners in West Germany

三　浦　洋　子

キーワード

西ドイツ、炭鉱、韓国人、炭鉱労働者、朴正熙大統領

はじめに

1963年、韓国と西ドイツの間で炭鉱労働者派遣に関する協定が結ばれ、以後1977年までに7,936人の韓国人がルールやザールの炭鉱で働いた。就労期間は３年、地下1000m、気温40度で粉塵が舞い上がる中での石炭の掘削作業は、まさに三K労働ではあったが、それでも志願者は大勢いた。さらに、同時期、韓国人女性たちも西ドイツへ看護師として派遣され、同じく63年から77年までにその数は17,980人にのぼった。

これには、西ドイツの高度経済成長とエネルギー不足、さらに高齢化と若年労働力不足、韓国の南北分断や朝鮮戦争による国土疲弊、貧困と失業者の増加等、それぞれの背景があった。

第１回目（本稿）では､韓国の若者がいかにして西ドイツの炭鉱に派遣され、どのような生活を送ったかという手記（권이종(クォン・イチョン)著「막장광부 교수가 되다（炭鉱労働者が大学教授になるまで）」2012　図書出版異彩）を抄訳して掲載する。そして２回目以降、韓国や西ドイツの当時の経済事情を明らかにする。さらに、目的は少々異なるが、日本人も韓国人に先立ち、炭鉱労働者として西ドイツに派遣されている。その実情にもふれることにする。

クォン・イチョン著「炭鉱労働者が大学教授になるまで」（三浦洋子訳）

第１章　一瞬の選択が運命を変えた

貧困が与えたプレゼント

私は1940年全羅北道、長水郡の寒村で、貧農の４人兄弟の末っ子として育った。当時の貧困は、今の若者には想像さえできないだろうが、春になると、前年に収穫した穀物は底をつき、しかし畑の麦はまだ食べられない。人々は飢えて食べ物を求めて野山をさまようしかなくなる。

食欲旺盛な成長期に、まともに食べることができず、栄養不足の小柄な体に背負子を背負って重労働したので、背が伸びなかったかもしれない。もしそのころ、よく食べていたなら、今の若者世代のように、背も高くて体格も良かったはずである。

しかし、貧困の中で鍛練されたため、食べ物のことで不平を言ったことは１度もない。食べて、寝て、着る、というすべてのものに感謝するという生き方が身についたからである。今でも何でもおいしく食べて、ご飯ひとさじ、おかずも残さない。

しかも、終戦直後であったから、食べ物だけでなく、すべての物資が不足していた。その上、家は貧しかったので、小学校にあがる前から、山に登って木を切って薪を作って売ることもした。

過ぎて見ると当時の生活はまことに悲惨だった。だが、貧困になれると、それが当たり前であり、自分が不幸だなどと考えたことはなかった。むしろ、貧困は、私に失敗にも屈しない固い意志を与えてくれた原動力だったといえる。そして貧困のおかげで、私は絶えず努力することができた。貧しかったあの時代があったからこそ、今日、小さい成功でもおさめることができたのだ。私は「貧困はすなわち、成功の秘訣だ」という言葉をいつも念頭に置いて生きている。私の人生がそうであったし、私の生涯の決定的なさまざまなきっかけは、すべて貧困が与えてくれた「プレゼント」だともいえる。

1950年代、韓国農村の実情はみじめなことこの上なかった。通学するときの服装は、母が手ずから織って作った木綿ずぼんと上着、黒ゴム靴、そして本とノートを巻き包む風呂敷が全てであった。

黒ゴム靴は、育ち盛りだったので、大人たちはすこしでも長く履けるようにと、子供たちの足の大きさよりはるかに大きい靴を買ったので、ひきずりながら歩いた。しかし私はそのようなゴム靴さえはくのが惜しくて、寒い冬以外は裸足で学校へ通った。それでも、学校行くことが楽しくてたまらなかった。

教科書の配布もままならず、学期が終わるまで本なしで勉強したこともあったし、ノートがなくて、砂の上で文字練習をすることもあった。なんとか貴重なノートを１冊買ったときは、表紙から最後のページまで、ゴマ粒のように小さい文字で全部を埋め尽くした。空白があるなどということは、とてももったいなかった。それでも再びその上にまたぎっしりと書いたので、白い紙は最後にはカーボン紙のように真っ黒になった。

鉛筆を握った右手は、ノートの上を縦横無尽に動くので、黒鉛粉が付いてツルツルになったし、鉛筆が短くなって握りにくくなれば、竹筒にさして最後まで使いきろうとした。消しゴムがなくて指に唾をつけて消したりもして、そうするうちに紙が唾にぬれて穴があくと困り果てた。筆記した部分がまったくわからなくなってしまったからだ。

電気が各家に設置される前まで、田舎では石油灯の明かりをつけて本を読んだ。座卓がなくて、脚のぐらついているお膳をひっぱりだしてきて、そこに本を置いて読んだ。兄弟が多かったから、毎日食卓を独り占めするわけにはいかなかった。部屋の床に腹ばいとなり、うつ伏せになって鉛筆の芯をなめながら一生懸命宿題をした。勉強が本当におもしろかったし、またしたかった。

授業が終わった後には、畑に肥料をやり、農作業を手伝い、また背負子を背負って高い山に登ってたきぎを取った。冬には学校の暖炉に使う燃料を各々家から持っていかなければならなかった。豊かでなかったのは、学校も同じだった。寒い朝には、私たちは、教科書の代わりに薪を背負って家を出た。校門が

近づくと、薪を持ってくることが出来なかった子供たちの表情は暗かった。夏には学校にある畑に肥料をやるために、家で堆肥を作って持っていった。よく発酵した堆肥を持って行くときは、独特な臭いのために、皆の表情が見ものだった。

それでも子供たちは皆楽しそうに学校へ行った。当時の村は１つの大きな共同体で、互いに助け合い、分け合って食べ、燃料も持ち合って、共に育てあった。貧困のために弁当など考えも及ばなかったが、何かの折に弁当を持って行ける日は、朝から心がはずんだ。おかずといえば、ゴマに塩味をつけてゴマ油で炒っただけだったが、早く食べたくて、昼休みが待ちどおしくてたまらなかった。弁当を持っていける日はお祭り気分だった。

穀物を惜しむため、日に１、２度の食事は必ずおかゆを食べたので、いつもお腹がすいていた。お腹いっぱいにご飯を食べる方法が、まったくなかったわけではない。少々肩身がせまいが、兄が金持ちの家に仕事をしに行く時をみはからって、すばやくついて行き、その家でご飯を一緒にいただくのであった。だが、そんなことがいつもあったわけではない。

結局、両親はあれこれ思案の末に、我が家より少し暮らし向きが良い家に、私をしばらく養子に預けたりもした。

このように、私たちは育ちざかりには、常にお腹をすかし、また、勉強に飢えていた。学校は楽しく、特に小学校２年時の担任の先生が小柄な私をとても可愛がって下さり、私も大きくなったら、素敵な先生になりたいと願っていた。

母の米１俵

小学校を卒業したが、中学には進学できなかった。休みになると、中学に進学した友人が中学生の帽子をかぶって故郷に戻ったりした。仕事の手を止めて、その姿を見守るとき、うらやましいことこの上なかった。私には何の未来もなく、農作業をしているだけなのが悲しくて、こぶしをぎゅっと握って決心をした。「私も中学生の帽子をかぶるんだ。私も勉強したい」

1954年、私は両親に何もいわず、無鉄砲に家を飛び出して、全羅北道庁所在地である全州へ行って、中学校の入学試験を受け、合格してしまった。両親の許しもなしに受けた入学試験だったので、合格はしたが自慢していうことはできなかった。だが、私は自力で学費を用意する方法がなかったので１人悩み続け、ついに一部始終を母に話した。母は「なんとかして学校にやってやる。」と言って、朝早く村の金持ちの家を訪ねて脅迫した。「米１俵を貸してくれるまで、私はこの家の門の前を絶対離れません。」

母は、本当に、朝から１日中金持ちの家の門前に、びくともしないで木像のように立っていた。家主は、あきれかえって、とうとう降参した。

母がどれくらい頑固なのか、私たちはその時分かった。いや、わが子のためならば、どんなことでもできるという、がんとした粘り強い意志を、私たちは母から見て取った。結局、日暮れまでに米１俵を得てきたのだ。こうして私は１年後ではあるが、何とか中学校に進学することができた。

しかしその時からまた、新しい戦いが始まったのだった。中学校に入学後、私は家族と離れて、学校がある全州に自炊のできる部屋を借りて、１人暮らしを始めた。そして自力で学費を稼ぐために新聞配達を始めた。この時始めた新聞配達は、高等学校を卒業する時まで、さらに苦学生活は、西ドイツで博士学位を受ける時まで続いた。

そのように稼いだお金など大したことはないから、１度も授業料を支払い期限までにおさめたことがなく、叱られたり体罰もよく受けた。貧困もつらいのに、そのためにむちで打たれる時は限りなく悲しかった。それでも私の境遇を心配してくださった先生は、１学期分の授業料を払ってくださったこともあった。私は一生その恩恵を忘れることができない。

高等学校進学後も、自炊をしながら新聞配達をした。部屋は、貧民街のほとんどが壊れかけた板張りの粗末な家だった。水道がなくて、飲み水と食事の仕度をする水も貴重だった。煉炭ひとつ買う金もなく、寒い冬にはインクまで凍りつく冷気いっぱいの部屋で、薄いふとん１枚で震えていた。

辛かった学生生活

新聞配達と自炊生活でやっと食いつなぎながら勉強をして、6年が過ぎていった。小学校の時から抱いてきた、先生になろうと思ったその夢は遠い遠い虹のようなものだった。

休みになると、全北道任実郡聖寿面の深い山奥に住んでいる、姉の家に行って働いた。学費を用意するにはこの方法しかなかった。山で片っ端から木を切ってきて、薪を作って売った。今そんなことをしたら、山林保護法に抵触して拘束されるが、当時は持ち主に見つからなければ良かったのである。

ところで木を切って薪を作る仕事がどんなに大変だったことか。高等学校3年であっても、栄養失調で発育が悪い小さい体格の19才の少年には、どれくらい頑張れたか。年輪をよく見極めてきちんと打ち下ろさなければ、いくら繰り返し斧を打ちおろしても、木は割れなかった。木のクズが落ちるだけで、なかなか手ごわい木を相手に難儀させられた。私の思い通りに割れない木は、あたかも世の中と同じだった。

がんばったが、生活はますます難しくなった。朝刊の新聞配達だけでは、学費と生活費を工面するには、遠く及ばなかった。下校後、夕刊まで配達すれば、朝夕で3時間は必死になって町内を飛び回らなければならなかった。完全にへとへとになって、学校でも家でも、机に座りさえすればうとうと居眠りした。

新聞配達よりさらに難しいのは集金だった。当時には新聞を見ても、代金を出さない人がとても多かった。「集金がたくさんできれば、私も金をもらえるのに」と思って、ひもじくても声をふりしぼって喧嘩腰になったことも何度もあった。ある家では、たまった新聞代金を受けとるために、何回も声を荒げたこともあった。そうこうして、やっとお金を受け取れば、力が抜けて歩く気力もなかった。

学費と家賃を出したら、本当に1銭も残っていなかった。小学校の時にも、飢えることは日常茶飯事だったが、学年が上がっても飢えることに変わりはなかった。飢えを満たすために、我を忘れて水をがぶがぶ飲んだ。そのような日

は、腹はちょっと膨らんだが、顔は黄色くむくんでいた。

鶏どろぼうやスイカどろぼう、バスや汽車の無賃乗車は、隠したい記憶だが、学生時代に私がやっていたことだ。どうにか生きなければならなかったため、悪いことだと知りつつ、やめられなかったそうした悪い仕事を、今だから話せる。このように困難な状況の中でも、私は高校生の時ＲＣＹ赤十字団体活動を熱心にした。

休暇には、農漁村に行って文盲退治運動も率先してやったし、全州のすべての中高等学校の学生を対象にした学芸会も直接計画して推進した。台風サラ号が襲った時には、募金運動をして被災者に救援物資を送ったり、学校で学用品を集めて水害を受けた子供たちを助け、被災者の学生たちにも手を差し伸べた。

１人で学校の運動場を清掃したり、花壇を作るなどボランティア活動もしたが、当時経験した団体およびサークル活動が、生涯かけて、青少年運動をするのに大いに役立った。私が肯定的な人生を生きるようになったのは、学生時代サークル活動を熱心に行った結果であろう。

こうした活動の結果、全北で、赤十字団体活動を最も模範的にした学生として、各種賞を受ける光栄にあずかった。苦労はしたが、過ぎてしまえば、すべてが美しい思い出であった。しかし、当時、お金がなくて卒業アルバムを購入できなかった。それで今、私にはなつかしい顔がそろった小、中、高等学校のアルバムが１つもないのが残念でならない。

富裕な父、忘れることのできない母

私は非常に貧しい家庭に育ったが、祖父は村で１番の金持ちだったという。村全体の田畑と山がほとんど祖父所有で、解放後でも、祖父の家には自動車が２台もあった。その自動車に乗ったことを覚えている。父は、いわゆる泉石郡の家の末っ子だったので、いつもやさしい笑顔で暮らしにも余裕があった。母は、私に罰を与えたりたたいたこともあるが、父は全くそのようなことがなかった。父は40才の時、２才年上である母と結婚した。

父は祖父から少なくはない田畑を受け継いだが、少しずつ売ってしまい、気が付くと３マジキ（500坪）しか残っていなかった。その田畑が、我が家に残された唯一の財産であり、生計のよりどころであったし、生活はすべて、母の肩にかかっていた。

もちろん父も辛くなかったはずがない。そのためか酒をよく飲んでいたが、酔いつぶれて道端にころがって寝てしまったり、川に落ちて流されそうになったこともあった。

私が西ドイツにいる時、父は亡くなったが、兄は連絡をしてこなかった。もっとも連絡をしても、私が韓国に帰ることができる状況ではなかったが。臨終をみとれなかった父、そのやさしい笑顔と慈愛に満ちた心は、いつも私の心に残っている。

崩れかけた葺３間の家、畑は３マジキがすべてという苦しい暮らしだったが、母の教育に対する熱意はすごかった。米１俵事件以後、常に私の学費のために苦労が多かった母は、全州のある酒場の女性従業員の赤ん坊をつれてきては世話をした。韓国版ベビーシッターの元祖であろう。母は文盲であったが、息子だけには教育を受けさせようという意志は、誰にもひけをとらなかった。私が博士学位を受けた時、とめどなく喜びの涙を流した母、亡くなる瞬間まで、学士帽をかぶった私の写真をふところにいれていた母が、懐かしくてたまらない。

一瞬の選択が運命を変える

1961年、高等学校を卒業するとすぐに入営通知書がきた。戦争と家庭の事情で、小学校の時１年間休んだし、また、卒業してすぐに中学校に入ることができず、また、１年間休んだので、他の学生たちより私は２才上だった。中・高等学校時のつらい苦学生活で欠席も多かったし、栄養不足で学業にも集中できなかったため、大学への入学などは思いもよらず、入営日３月14日に入隊した。２年間の軍隊生活で唯一の慰安は信仰だった。毎日、祈りで始め、祈りで日課を終えた。

毎週水曜日と日曜日には部隊付近の民間人の教会に行って礼拝を捧げた。日曜学校で子供たちと共に勉強したが、その時間が最も楽しかった。軍隊でも、私は先生になって子供たちと過ごすその夢を忘れなかった。いつか、私はその夢を成し遂げるだろうという希望を捨てなかったのだ。

除隊して故郷に帰ってきたが、私を待つのは相変わらずの貧困だった。高等学校を卒業したが、私ができることは農作業しかなかった。狭苦しくてみすぼらしいわらぶきの家だったが、私が生まれてから今まで生きてきた地であるだけに、今後どのように生きていくのか、非常に悩んだ。

1963年春、私の運命は姪のおかげで、変わることになった。姪は自炊の部屋に米の飯と食べ物を持ってきたり、友人に頼んで弁当を届けてもくれた。また、女子学生の身で、雪の積もった寒い冬の明け方、親にも言わず、こっそりと新聞配達まで助けてくれたこともあった。

その姪が、ある春の日朝早く、不意にソウルから田舎にいる私を訪ねてきた。「おじさん、ソウルの工事現場で肉体労働するつもりはありませんか。」どんな事でもしなくてはならない状態だった私は、迷わず「やる」と答えた。そして兄と相談して、麦と鶏を売って旅費をなんとか工面し、姪とともに鈍行の夜行列車に乗ってソウルに到着した。

言葉だけで聞いたソウルにいよいよ来た。姪の紹介で会った建築業者は、私を見るとすぐに尋ねた。「からだが弱そうに見えるが、仕事をすることができますか？からだが丈夫で力が強くなければねえ。仕事をしたことのない人には、とても無理ですよ。見た目より、かなり大変なんですよ。」私は、「それでも農作業をやった経験があるので、頑張ります。どんな事でもさせて下さい。」建築業者の言う通り、肉体労働をしたことがない私としては、このように答えるほかはなかった。

私の初めての職場は、４階建てビルティングを建てる建築現場だった。朝早くから私は、「大ハンマー」と呼ばれる大きい槌を利用して、鉄筋を切ったり砂とレンガを背負って23階に運んだりした。大変な毎日だったが、１年近く色々

な工事現場を転々としてその日暮らしの人生を生きた。

ある日工事現場で一緒に仕事をしていた漢陽大の工大生が、私にとんでもない提案をしてきた。

「クォン君、私と西ドイツに行くつもりない？」「西ドイツ？いったいそんな所に何をしに？」

「クォン君、この頃新聞も見てないの？皆西ドイツへ行くと言って大騒ぎなのに。」そして私に新聞を差し出した。

「狭いルール坑口の町角」(東亜日報)という題名の、鉱山労働者募集記事が目にとまった。

「いったいどんな仕事で、５百人募集にこのようにたくさんの人が集まったのだろう？すごいものだね。」本当にそうであった。

1963年８月募集当時、新聞には2,527人が集まり、締め切り時間になればさらに多くの人々で混みあった、と書いてあった。韓国政府は1963年12月から１，２，３陣に分けて、「西ドイツ派遣鉱山労働者」を募集したが、資格条件は「35才未満の身体健康な大韓民国男性で、兵役をすませた鉱山労働者経験者」であった。工大生の話を聞いて、私の耳目はパッと開かれた。「今の世の中で、そのようにお金をたくさん稼ぐ方法が他にあるのか？」

毎月平均７百マルク（150ドル）を得られることができるということが、夢のようだった。たくさん稼ぐ人は、千マルク以上にもなった。１マルクが、韓国ウォンで50、60ウォン水準であったから、約４万ウォン程度になった。これは５級公務員の月給（3600ウォン）の10倍に相当し、高額年俸者であった銀行員の１年の年俸と釣り合う額だった。当時ソウルの家１軒の値段が405万ウォンであったから、非常に多くの金額だった。その上、西ドイツで鉱山労働者として３年だけ勤めて帰ってくれば、国内の鉱業開発の技術者として勤められるように、働き口も保証するということである。このような好機は、生涯２度とは訪れないだろう。私は、話だけ聞いても心が膨らんで、何とかして必ず行かなくては、という思いでいっぱいだった。

「ところで話によれば、２年以上の鉱山労働者の経験者でなければダメなんじゃないの。君も私も炭鉱に行ってみたこともないのに、選ばれるかい？」と尋ねると、「ちゃんと解決方法があるんですよ」という。話を聞いて見ると、膨らんだ心が徐々に沈んでいき、心配が先にたった。

「果たして、私のように学閥もなくて経歴もない者にチャンスがあるのだろうか？」

応募者は、ほとんど高等学校を卒業して、大学中退者と名門大卒業者も幾人かは含まれていた。そして、すでに国内で国会議員秘書官など立派な職業を有している人々もいて、前職教師、失敗した事業家、予備役将校、ソウルあたりのやくざあがり等、多様な職業と年齢の人々が応募し、競争がし烈そのものであった。

「西ドイツ派遣鉱山労働者」、それは、戦乱の傷と時代の貧困を突き破っていく脱出口であった。国民２千５百万人中、失業者が250万人もなって、高学歴の失業者が列をなしていた時代、仕事をする適齢期の男たちは、手段も方法も選ばず鉱山労働者に、女たちは看護師として、西ドイツ行きを選んだ。

私もまた同様だった。生まれた時から味わってきた、うんざりする貧困から解放されたいと切望し、20代青春の苦悩を「西ドイツ派遣鉱山労働者」という、非常口を通じて解消したかったのだ。

必ず貧困のくびきを脱して、人生の大きな転換のチャンスをつかむのだ。そして必ず成功して帰ってくるのだ。その日暮らしの私は、工事現場の仕事も怠ることができなくて、漢陽大工大生の助けを借りて、やっと書類を送り、体力検査の日を待った。

視力、体重、血液および尿検査、エックス線検査など基本的身体検査の他に、駆け足、バーベル、懸垂、60キロの重さの砂カマスを肩の上に持ち上げるなど、体力検査を行った。応募者の中には、下限体重である60キロに合わせるために、下着の中に鉄の塊をこっそりとつけたり、検査直前にジャージャー麺を腹いっぱい食べて、水道水でお腹を満たしたりもした。私にとっては、農作業と工事

で鍛えられた体だったから、大変な試験ではなかった。英語と国史の科目などの筆記試験には、予想問題集が出回るほどであった。最後の関門である面接に通過するために、「手がきれいな」大卒受験者は、面接官の前に出る前、煉炭に手をこすり続けて、黒くて節くれて見えるようにもした。

「クォン君、私たちは合格しましたよ。」工大生と私は、共に合格の幸運をつかみ取った。私は世の中のすべてを手に入れたように、うれしかった。１次合格者は676人だった。私が志願した１次２陣は、429人の募集に数千人が集まって、今の大学入試を彷彿とさせるほど激しい競争率であった。とにかく、私たちは西ドイツ工業団地の心臓部であるルール行きの、狭い１次関門を見事に通過した。

合格者たちは、江原道、太白とチャンソンの炭鉱で、数週間の現場教育を受けた。理論教育と安全教育を１週間受けて、3週間は鉱山で実際に仕事をした。

しかし、現職鉱山労働者のように、力に余ったことは経験できなかった。

招集公文書要約

受信者：出国候補者全員429人

貴下は西ドイツ派遣鉱山労働者に選抜され、所定の訓練過程を終えて、西ドイツのルール鉱業会社に就職され、出国準備に忙しいことと思われるが、貴下の出国日が確定したことで、次に基づいて招集することに格別留意されて、落伍することがないことを希望する。

出国日時は1964年10月５日、集合時は1964年９月30日10時、集合場所は再建国民運動訓練院（ソウル、城北区、水踰里)。

その他の事項で増えたことは、招集以後に外出を許さず、招集に応じないものは棄権と処理し、西ドイツでは購入することが困難な薬品を持参して、韓国文化紹介のための娯楽物準備と、コチュカルなど嗜好品持参、寄生虫検査結果で寄生虫が発見された者は、出国を取り消す。出発までの合宿費は本人負担、持参準備金は50ドル未満、そして西ドイツに到着後、写真が必要なはずである

から、証明写真４枚程度は携帯した方が良いこと等であった。

1964年９月22日　労働庁長イ・チャンウ

第２の両親、兄と兄嫁

1963年12月、まず１次１陣として、鉱山労働者の西ドイツ派遣が成立した。ほどなく、私を含んだ２陣の鉱山労働者候補者が招集された。合格はしたものの、西ドイツに行くまでには、越えなければならない障壁が多かった。１番大きい問題は、やはり経費であった。

「兄さん､私をちょっと助けて下さい。今回は必ず行かなければなりません。」

「分かったよ。お前がうまくいくなら、私は何も惜しくないよ。」

飼っていた牛を売って経費を出してほしい、という私の大胆な願いを、兄はためらいもなく承諾した。貧農の兄にとって、牛は最も大きい財産であり、唯一の生計手段だった。それを売るということは農夫として全財産を出すことでもあった。兄は牛１頭と麦15袋を売ってくれたが、その金のおかげで西ドイツに行く準備ができた。

だが、それが終わりではなかった。鉱山労働者としてすっきりした姿をしろということで洋服、ワイシャツ、ネクタイ、靴が必要で、これも頼りは兄しかいなかった。「兄さん、これが最後です。行ったら初めての月給から送りますから。」

このようにして私は生まれて初めて洋服を着ることができた。ワイシャツとネクタイは遠い親戚から、後がほとんどすりへった靴は友人から得た。兄は貧困から抜け出すために一生努力した人間だ。故郷の家では、兄と兄嫁が一緒に住んでいる。兄の勤勉さにはとてもかなわない。

兄が結婚をして軍に入隊したので、兄嫁は小学校４年の私とひとつ屋根の下で生活した。したがって、兄嫁を越えた、あたかも母のように私を見守ってくれた。兄嫁は料理上手であった。材料が不足しても､調理は味がよいのは無論、名節や家族の誕生日には伝統料理をつくってくれたが、その味は今でも忘れる

ことはできない。今も私は食べたい物を思い出すと、田舎に行って、兄嫁に食べ物を作ってくれと頼む。

西ドイツ行き飛行機に乗って

出国日が近づいた。激しい競争の中、合格して出国が決定された後からは、新しい世界に対する期待で興奮していた。生活費を稼ぐために、依然として肉体労働をしながらも、西ドイツに行けば、このような苦労とはお別れだ、と漠然と思っていた。噂では、ガス爆発が起きることもあって、坑道が崩れて事故で死ぬ人が多いというが、「そのような厳しいところで生き残って、再び故郷に帰ってくることができるだろうか？」「愛する両親兄弟とまた会うことができるだろうか？」切迫した想像だけが私の心をよぎった。全てのことは運に任せよう、と自らをなだめて、だんだんなくなる石油の灯の中、ため息を吐くと夜が明けた。幼い時飛び回った野と山、母のとても悲しい見送りを受けて、全北、任実郡、オス駅まで30里の道を歩いて、ソウル行きの鈍行列車に乗った。

1964年９月30日午前中、ソウル、城北区、水踰里所在の再建国民運動訓練院には、西ドイツに出発する鉱山労働者429人全員が集まった。

「いよいよ出発だな。」緊張した雰囲気の中で、私たちは出国前まで全員外出禁止状態で、西ドイツに対する一般教養教育を受けた。そして寄生虫検査も実施された。もし寄生虫が発見されれば、直ちに出国が取り消しされた。医学が発達した西ドイツには寄生虫がいないので、もしもの伝染を憂慮したためだという。

教育内容はなじみがうすかったが、貧困から抜け出すという一念で皆熱心だった。話が通じない外国に出て、どうにか金を稼ぐという覚悟で臨んだので、熱気を帯びていた。だが、興奮と情熱、希望に満ちた笑いの後には、各々わからない不安感を抱いていて、私は内心叫んだ。「いや、私は生きて帰ってくるぞ。生きて必ず故郷の家に戻るぞ。」

いよいよ出発日が確定した。10月５日、訓練院のドアが開いて私たちを乗せ

たバスが出発した。家族との別れの前に、限りなく弱くなる１人の人間である私は「再びこの道を帰ることができるだろうか？」と思わず涙がはらはらと流れた。

金浦空港からルフトハンザの、初めてみる西ドイツ飛行機に乗った。飛行機に乗ると、全てのものが珍しくて室内を行き来して窓の外を見通すのに忙しかった。

金浦空港を出発し、米国、アラスカを経由して、西ドイツのデュッセルドルフ空港へ向かった。今のように、韓国からロシア（旧ソ連）を通過できなかった時期で、アラスカで給油して、乗務員が交替して総19時間の飛行で、私たちはついに西ドイツに初めて足を踏み入れた。私の人生最大の転換点はこのように始まった。

第２章　西ドイツ派遣鉱山労働者となる

私たちは外国人労働者

初めて飛行機に乗り、長時間かかって西ドイツに到着したので、みんな疲れていたが、デュッセルドルフ空港には、出迎えの第１陣の先輩たちを見た瞬間、元気が出た。しかし、腕と脚に包帯を巻いたある先輩の姿を見つけ、すぐに恐怖感におそわれた。採掘場で仕事をしていて、ケガをしたのだった。私たちはいくつかのグループに分かれて、各自配属された炭鉱へ向かった

ヨーロッパ最大の石炭埋蔵量を誇るルール工業地帯は、第二次世界大戦後、西ドイツの工業を再建育成する中心地であった。付近のアーヘンとライン川周辺では、採炭作業が進行していたが、当時西ドイツでは、戦争後遺症で、男性労働者が枯渇していて、ギリシャ、ユーゴ、ポーランド、イタリア、日本など数十ヶ国から、労働者がきて、作業をしていた。

私たちは、坑内に入る前４週間、坑内で必要なドイツ語を習い、機械と道具に対するオリエンテーションを３ヶ月間受けた後、各自仕事場に配置された。

「韓国からこられた鉱夫の皆さん、皆さんは今後３ヶ月の間、石炭の採炭の

ための訓練を受けるでしょう。地下での作業は非常に危険なので、一定の訓練が必要です。それが他人と自身の生命を守る唯一の道です。訓練結果により、配置が変わるので、頑張ってください。特に、他人の生命と安全に関係する作業は、ドイツ語で十分にやりとりすべきなので、ドイツ語教育時間は集中して下さい。そしてこれから皆さんは、西ドイツ法に基づいて、西ドイツ市民と同等に、人権と身体および財産に対する保護を受けることになるので、責任感と自尊心を持って仕事をして下さい。」

私が配属されたところは、西ドイツ（EBV）のメルクシュタイン地域アドルフ炭鉱だった。いよいよつらい坑内生活が始まったのだ。私たちは「西ドイツ派遣鉱夫」という、不慣れな呼称で呼ばれ、色々な人種が入り乱れた外国労働者の一人として、新しい運命と立ち向かった。

西ドイツ鉱山会社側は、韓国政府に現職鉱夫を派遣することを求めただけに、私たち皆が鉱夫経験者と知っていた。だが、実際に西ドイツに来た私たち大部分は、４週間、江原道の鉱山で、現場実習をしたのがすべてであった。いわゆる、バックがある人は、実習さえしないできたので、採掘場がどのようにできたかもしらなかった。

世界的に、石炭は国家の基幹産業を動かすエネルギー源だった。石油が「黒い真珠」だったように、石炭は「黒いダイヤ」だった。

韓国も解放と朝鮮戦争を経て、本格的な産業化を推進した時期、西欧と同じように、石炭は経済発展の原動力だった。国家主導の経済開発５ヶ年計画の施行とともに、年間30万トン以上が生産されるように、政府が支援を惜しまなかった。「漢江の奇跡」は、このような石炭産業の後押しなしでは不可能だった。開発期の電力不足は、石炭による火力発電で解消されたし、世界的なオイルショック時にも、石炭増産で危機を克服した。石炭を掘り出す鉱夫は、偉大な産業戦士だった。

さて、事前教育に入った私たちは、西ドイツ鉱山を見てびっくりした。私たちが想像したのとは全く違った。我が国は、高い山の深い谷間に炭鉱があるが、

こちら広い平野に鉱山村が位置していた。さらに、鉱山構造、機械と道具、作業方式などは比較できないほど先進的で機械化されていた。

私が仕事をするEBVメルクシュタイン鉱山は、第1次世界大戦以前、1909年から地下に降りて行くシャフトが２台設置され、1910年には1,088mとなり、採掘価値がある直径10mを超す石炭層を、９個も発見したという。その後３～５号機シャフトを増設して、1956年以後、採掘場は機械化された。それ以前には木造階段でも長いはしご、または太くて丈夫な綱にかかった大きな桶に乗って、一度に少数の人員だけが地下に降りて行けたのだが、シャフトが設置されてからは、一度に30～50人ずつのせて降りて行くことができるようになった。

同僚の死

遠い異国の地、数百mの地下で、恐怖と不安、期待と興奮が交差する中で、採掘場人生の初めてのスコップ作業が始まった。私たちが一番恐れたことは、地下深いところで真っ暗な採掘場では、いつ死ぬかもわからない、ということだった。肺をセメントのように固く固まらせる、という石粉と石炭粉を、毎日吸う時、私たちは死の恐怖を忘れようと故郷を思い出した。

鉱山でオリエンテーションを受けたとしても、私たちの作業はうまくなかった。採掘場では、誰も予想のできない事故が起きたりした。いくら気を付けても、事故が起こるのは一瞬だ。機械にからだが挟まってケガをしたり、手や足の指が切られるのは頻繁にあった。本当に運がなければ、失明したりもする。そして天井を支えるシュテムポル（鉄柱）が倒れたり、地盤の重さを持ちこたえることができなくてはねて出たり、曲がれば、熟練者としても、どうすることもできない。突然の死の前、茫然自失するだけだ。

ところで、西ドイツ鉱山の環境になじまない同僚が、仕事を始めてしばらくして命を失う事件が発生した。

「大変なことになった、天井が崩れて人が下敷きになったって。」

「誰、誰なの？死んだ、生きている？」

「イさんという人だ。皆駆け寄って石ころを除いて、やっと救出はしたが、命があるかは分からないよ。」

鉱山でたびたび起きる埋没事故であった。くもの巣のような西ドイツ鉱山の中で、作業の未熟さで、あっという間の出来事であった。三年をしっかり過ごしてみようと希望に膨らんで一緒にきた同僚が、もう冷たい死体に変わってあの世に行ってしまった。死体が霊柩車にのせられた時、葬儀場は涙の海になった。その日は、全員仕事をする気力もなくした。

私たちは生きていても、いつ犬死にするのか分からなかった。両親や兄弟と妻子を捨てて、異国まできた時には、自ら固い意志があったが、突然の同僚の死は、私たちを限りない不安に陥れた。

「明日からすぐに洞窟の中に入るのは心配だ。恐ろしくて、恐ろしくて、他人事でないというから。誰もそうはならないという保証がどこにあるのか」

同僚がやりとりする話をそばで聞いていたが、寂しいのは私とて同じだった。私が弱くなるたびに思い出したことは、故郷の母と兄だった。

「このまま帰ることはできない。私は死なない。兄に牛を買って上げなくちゃ。その時までは死ねない、絶対死ねない。」

新世界への適応

草創期、西ドイツに派遣された韓国人鉱夫の大部分は、鉱山で仕事をした経験が全くなかった。たまに鉱山で仕事をしたことがあっても、鉱山の構造が韓国と違う状況であり、こちらでうまく仕事をするということは、ほとんど不可能だった。

西ドイツ鉱山では、常に緊張した状態で、精神をすりへらした。前後左右、上下どの方向からでも、死神が駆け寄る準備をしているためだ。

西ドイツへの出発前、ドイツ語講座も江原道やチャンソンの炭鉱で数週間実習をしたが、それは形式に過ぎなかった。応募者の大半は、鉱山仕事や肉体労働もしたことがなくて、ツルハシやシャベルさえ持つことが出来なかった人々

だった。「とにかく韓国を離れてみよう。そうすれば何かあるだろう」と、偶然の幸運を望む気持ちで、韓国を脱出して西ドイツへ来たのだ。

失業青年があふれた1960年代、韓国の現実は、方向が分からない坑道と同じだった。

西ドイツ鉱山は、韓国の失業青年が国家間協約によって合法的にドルを稼げる、外国へ脱出できる、唯一の非常口であった。

真っ暗な坑道の中で、一筋の光について出口を探すように、青年たちは西ドイツで鉱夫となったし、また、鉱山労働契約終了後、勉強をしたりもしたし、近隣のヨーロッパの国やカナダ、米国へと旅立った。

1960年代始め、我が国の生活水準はみじめなことこの上なかった。輸出１億ドルで、国民所得は80～90ドルに過ぎなかった。産業施設といっても、紡織、製薬および合板工場のようなものが全てであったから、大学を卒業しても就職率は非常に低かったし、留学の道など想像もできなかった。外国に行くということ自体、特権層の専有物であったから、大学を卒業や中退した多くの若者たちには、鉱山仕事に対する、肉体的、精神的苦痛に対して、特に考えなしで、鉱夫募集に自らをかけたのであった。

このような理由で、韓国での実習や教育を真剣に受け入れた人はあまりいなかったようだ。しかし、私は状況がちょっと違っていて、外国留学は考えたこともなかったし、うんざりする貧困でただ抜け出したいという考えだけだった。自分とのかたい約束があったので、私は小さい機会でも与えられれば熱心に行った。ドイツ語を習う時も炭鉱実習をする時も、講師の手ぶりをみのがすまいと集中して、そのおかげで三年間の鉱夫生活を終える時まで、大きい事故を避けることができたかもしれない。鉱夫には、からだに傷がない人は殆どいない。振り返ると、鉱山勤務三年の間、私も事故を体験したが、頭からつま先まで四肢が正常なのは奇跡といえる。

韓国だけでなくて、他の外国人鉱夫の事件や事故が相次ぐ中、だんだん事故は当然と考えるようになった。だが、韓国で事前準備がもう少し徹底していた

ならば、という思いは切実だった。誰も西ドイツ鉱山がどのようにできたのか知って来た人はいなかった。現地事情に対して、あらかじめ教育だけでもまともに受けていれば、そのようなくやしい事故は防止できただろう。

私の仕事場は採掘場

採掘場生活を始めて、いつのまにか数ヶ月が過ぎた。鉱山仕事は、掘る、採炭、機械修理、保坑、運搬、選炭、安定などに分かれる。地上でする材料準備と供給、行政的なことは付随的であり、鉱山の主な業務はやはり地下での坑道仕事だ。

採掘場に入る前、鉱夫は更衣室で作業服に着替えて必要な道具を揃える。事前の準備作業は、生命を守ることである。特殊な安全靴と安全帽、ぶ厚い革手袋、低い炭層を這って行き来する時必要な膝の保護帯と前向こう脛保護帯、下り坂に必要なお尻保護帯、生命の光であるランプ（ヘッド・ランタン）とバッテリー、ガス流出に備えたガスマスク、そして４～６リットルの水桶とパンなどを準備する。あたかも戦場に出て行く軍人のように、完全武装をしている。安全帽と電灯、そしてバッテリーだけでも相当な重さである。

採炭作業は午前６時から２時、２時から８時、８時から次の日の午前６時まで、三交代で、鉱夫は朝班、午後班、夜間班として交代で勤めた。朝班は明け方に起きて、簡単に朝食をした後、お昼の弁当を準備して出勤する。ひとまず坑道に入れば、作業が終わる時まで出ることができないから、もし延長勤務をする予定だと、午後食べるおやつ、果物１、２個と、かたい西ドイツハム、水もあらかじめ充分に準備しなければならなかった。

午前６時前に採掘場に到着するためには、鉱夫は明け方4時ごろに起きなければならない。他の同僚は明け方の起床が苦手だったが、私は学生時代の６年間、ずっと夜明けに新聞配達をしていたので、早起きは苦痛ではなく、「朝型人間」だった。

それでも、夜明けに起きてあれこれ準備するのは、本当に苦痛だった。少し

怠ける日には、朝食を適当にして、出勤したものだった。そうすると、息が上がって、腕と脚がフラフラした。

マルケンヌムネ（鉱夫コード）1622

私たちの鉱夫には各自コードがあった。これは軍番号のようなもので、給料をはじめとして休暇、事故、死亡などすべてのことを処理する標識であった。コードが彫られた小さい金属製名札を、作業服に付着する。コード1622の鉱夫はまさに私だ。

鉱山の脱衣場には、鉱夫コードにより３、４ｍの長さの鎖が付与される。これが多用途の洋服掛け兼ロッカーの役割をする。鎖を解けば、上にあった私の作業服と履き物、洗面道具が降りてくる。

作業服を高くぶら下げておくのはなぜだろうか？それは、摂氏30～36度の温度と垂直500～1,200ｍ深さの地下坑道の中で、１～５㎞を水平移動して８時間重労働をして出てくると、全身と作業服は汗とホコリ、石炭粉と石粉にまみれて、湿っぽく、ひどい臭いまで漂う。特に、西ドイツ人や西洋の国の鉱夫の汗の臭いは、くさい。その上、長靴の中は汗でぐしょぐしょになっている。下着もやはり汗がしみこんで、作業途中、何回かは絞らないと、仕事をすることができない。採掘場から上がってくれば、汗と石炭粉にまみれて、きれいな水で洗い落とすまで、誰が誰なのか区別することはできない。作業をする間は、あたかも幽霊のようなみすぼらしい姿で過ごしているのだ。

お金を節約するために、余分な服は買わないから、毎日洗濯することもできない。ただ、汗の臭いの作業服に慣れることこそ、お金を節約するということだ、と私は考えた。服は乾けば、それなりにましであった。空気が流れる高いところにぶら下げておくことが、最善の方策だった。三年の間、私をかばって、汗と涙を含んだ有難い私の殻であった。

一日の仕事は次のようだ。各採掘場の監督官、作業班長と共に、シャフトに乗って地下に降りて行く。服装は似ているが、厳然とした区別がある。監督官

は白色の安全帽、一般鉱夫は黄色の安全帽をかぶる。地下に降りて行くエレベーターは、１台が３階に分かれ、各階ごとに15人程度が相乗りして一度に50人程度が乗ることができる。地下500m以上を降りて行くと、耳がぼうっとしてくる。ぱらぱらと地下水の落ちる音が聞こえる。漆黒の闇の中、高速で降りて行くエレベーターの中での、ぞっとした感じは、表現するのが難しい。

炭層により、地下数百mから千mを越えるまで降りて行き、再び他のエレベーターや車輛に乗り換えるか、歩いて、採掘場まで行った。坑道には強烈な風が吹いていて寒いが、採掘場に入れば、ほかほかとした熱気で苦しい。

作業場に到着すれば、班長の指示により、各自作業を始める。仕事が大変で、深くて危険なところに入れば、賃金がさらに増した。お金をたくさん稼ぎたい人は、採掘場に入った。私もしばらく鉱場で働き、体力があれば、監督官に話して、掘進作業に出ていくこともした。

一般的な鉱夫の仕事は、洞窟を突き抜けながら、坑木での保坑と、石炭脈が発見されれば採取して、鉱外へ運び、石炭を選び出すことだった。坑内作業は、石炭の生産と運搬が中心で、このために鉄柱と背負子で運ぶこと、削岩機穿孔、火薬発破、坑道保守、立て坑、掘削などで成り立つ。

鉱山作業は、仕事をした分だけ、金を受け取る「請負制」だ。がんばればがんばるほど金が儲かるから、体がつぶれるほど仕事をするが、地下で、重い装備を背負って、不便な姿勢で作業をするので、どんな力持ちでも、即座にくたくたに疲れる。鋭くてどっしりしている機械は一寸の誤差もなく行き来する。人が疲れたといっても、機械はそれに合わせることはない。機械の速度に合わせて、はやく坑木を支えなければ、天井が崩れる。

通常作業をする地盤は、完全に水平でなく、10～30度傾斜している。このように傾斜したところは、坑木をたてるには最悪だ。しかも、底に炭粉と石粉が敷かれていて、相当にすべりやすくて、作業を始める前には、傾斜面に合わせて鉄柱をたてて、天井が崩れないようにする。作業中に道具が滑り降りてしまえば、なくなってしまうので、柱は必ず縛っておかなければならない。

いくら気を付けても、斜面では事故が頻繁に発生する。三交代の時、前任の勤務者が作業場と道具をきれいに整理してくれないと、次の勤務者が仕事をする時非常に困る。作業場の整理は、事故予防の近道だ。作業場が汚れていたり、道具が本来の場所になければ、事故が起きる確率が高い。

石炭も、質と種類がさまざまで、硬度と色も違って、たまには光ったりもする。石炭を掘ることは、人がしなくて機械がする。ふわふわした石炭より、固い石炭のほうが危険度が低い。石炭を掘ってみると、いろいろ興味深いことがある。丈夫な石のスキ間に、木の葉や鳥、魚など多様な動植物の化石が発見されたりもする。数万年前は、こちらはすべてうっそうとした森であり、多くの動物たちが生存したことが推測できる。自然の神秘は終わりがない。

仕事を終えて、地下から地上に上がってくれば、鉱夫の顔は目と口以外は真っ黒である。そのようなときは、「鉱山番号は何ですか」とたずねる。

作業後は全身汗だくだ。下着を絞ると、塩辛い水が流れる。脱衣場で休息後、作業服を自身の鉄輪にかけて、鎖を引いて高く上げる。シャワールームで、からだを洗えば、気分が良くなる。更衣室でふだん着に着替えて、寄宿舎へ帰る。夕食を作るため買い物や、翌日着て行く、汗にぬれた靴下と下着を洗濯する。韓国から持ってきた流行歌のテープを聞いたり、手紙を書いていると、いつのまにか夜10時となる。翌日の明け方5時に起きるためには、遅くとも10時には寝なければならない。鉱夫の一日は、つらくて、単純だ。

石炭粉まみれのパンをかんで

金をたくさん稼ぐためには、危険な採掘場を選んで、より多くの仕事をするしかなかった。未婚者よりは既婚者に、既婚者でも子供がたくさんいる人に、給料がたくさん出た。後でわかったが、こうしたことを知って、お金を多くもらうために、韓国に妻と子供がいる、と書類を偽造する人もいた。誰でも、そのような話を聞くと、気持ちが傾くことになる。書類をうまく作成すれば、金をさらに稼ぐことができるのだ。友人の中には、そのように考え、初めには給

料が多くて調子にのったかも知れないが、書類上だが偽の妻子がいたのでは、誰も未婚の男性だとは信じてくれなかったし、女性に会ってつきあって結婚する約束をしても、うそがばれ、婚約破棄されることもたびたびあった。

韓国の両親と兄、兄嫁を思い出し、必死でお金を稼ぐ手段は、ただ延長勤務しかなかった。西ドイツ派遣鉱夫の中で、多分私が最も多く延長勤務をした１人であろう。私は、やっと体重60kgで疲労と栄養失調でさまよいながらも、延長勤務を望んだ目的はただ一つ、１日でもはやく貧困から抜け出したいためだった。

摂氏30～36度もの高温の地下採掘場は、じっとしていても息が詰まる。まして、厚い作業服に色々な装備を備えた状態で、機械の間で坑道を突き抜けて40～60kgのシュテムピル（鉄柱）を、１日60～80づつ建て、石炭を掘りおこして積み出す重労働で、8時間を持ちこたえる。汗が全身をぐるぐる流れて、ぽたぽた落ちる。石炭粉とホコリが汗とまぜこぜになって粘りつき、視野まで不透明に薄れて精神まで混迷する。作業を始めてすぐに、思わず疲れて気が抜ける。

延長勤務というのは、このような状態で、16時間を地下でモグラのように仕事をするから、事故と後日の塵肺症で、自分の生命を縮める近道だった。鉱夫というのは、自分のからだを担保にとられた、その日暮らし人生ともいえた。

作業ができる幅４ｍの空間の中では、巨大機械が占めている。採炭をするために、荒っぽく戻る歯車が走った機械、また掘りおこした石炭を休む暇もなく運ぶ機械が、轟音と覆われたホコリの中で、同時に動く。鉱夫は石炭を掘り出す。石炭を探して前進して、石の間に隠された石炭を掘りおこす。いつも採掘場の裏面の天井を押し倒して、正面の炭層まで前進する。このように前進しながら、前後の天井の石と、正面炭層が崩れないように、どっしりした鉄柱をずっとたてていなければならない。そのような意味で、鉱夫というのは、本能的にいかなる抵抗にもずっとブルドーザーのように前進する人を意味する。

「鉄柱」については、いろいろ話しがある。韓国の炭鉱は、一般に木柱を使っ

て支えるが、西ドイツ鉱山ではシュテムピルと呼ばれる鉄柱を使う。高いのは200m、重さは40～60kgの鉄柱を、採炭中にずっとたてていかなければならない。そうでなければ洞窟の中での前進は不可能だ。またシュテムピルをまともにたてることができなければ、自分の命を保護することはできない。安全な環境で作業をしなければ、すぐに埋没する確率が高くて、事故はたいてい死につながる。そのような意味で、シュテムピルは「命柱」だ。

休憩時間は定められていなくて、各自仕事をして適当な時間に休息する。石炭粉と石粉が飛ぶ採掘場の中で、真っ黒な手でパンをちぎるのは幸福である。岩底にどっかり座り込んで、ぐいぐいと水を飲む。8時間仕事をする間には2リットルでも足りない。体力消耗が激しいためだ。つつんで入れておいたパンとチーズ、ソーセージにはいつ入ったのか石炭粉が入っている。パンを切り取って食べると、口の中であらゆる粉がパンと混じる。味わうというより、体力を維持するために食べると考えたが、馴れてきたのか、西ドイツの食べ物もおいしいと感じるようになった。

命を担保にした採炭作業

西ドイツ鉱山と比較すると、1960年代の韓国の採炭方法は、非常に原始的で単純だった。鉱夫が使う道具は、ツルハシ、シャベルそして筒が全部であり、特に鉄柱でなく木柱を使って、落盤を防いだという話だ。

人力だけに依存して採掘し、石炭を選び出したし、さらに女性鉱夫が大きなたらいに石炭をいれて運ぶことさえした。採掘と選炭、運搬まで、基幹産業のエネルギー源調達過程は、大部分、手工業式で成り立った。これは石炭埋蔵構造とも緊密に関係している。

韓国の炭鉱は、大根やさつまいものような垂直型なのに対して、西ドイツのそれはもち米のような水平構造だ。韓国での作業が極めて単純で原始的だった時期、西ドイツではすでに超現代的な機械設備と道具で、多くの作業過程は機械化されていた。採掘場で私たちが使った機械は名前も初めて聞くものばかり

だった。

刃のように鋭く作られて、自動で石炭を掘っていく道具「ホーベル」、重いかなづち「ハンマー」、鉄製のくさび「ケイル」、水空気収合柱「バッサーシュテムピル」、鉄製の柱「シュテムピル」、木柱「ホルツシュテムピル」、空気水圧機で製作された自動掘削機「ピックハンマー」、そして石炭を積み出すコンベヤーベルト「パンター」、それに「シャベル」とのこぎり等が西ドイツ鉱山で使う道具だ。

ツルハシの代わりに、雄壮な採炭機械ホーベルが長さ250mの炭層を上下に掘っていく。また、ホーベルにかかった直径60～80㎝の特殊金属刃が、石のように固い石炭の塊りを、容赦なくツキまくり、岩についている炭層の底を行き来しながら、低いところは炭層が高く１m未満、高いところは縦２m、長さ250mの鉄板のベルトが、コンベヤーに石炭をのせる。直径が約60～70㎝のホーベルの金属刃が前進する時、「警戒１号」だ。事故を予防して鉱夫が生き残るためには、その空間が崩れないように、速かに後続の作業をしなければならない。

前で石炭が崩れるか、後から石が崩れる時は、石炭粉と石粉が覆いかぶさるので、視野が２、３m程度しか確保されず、すべての瞬間が生と死を左右する大小の事故につながる可能性がある。仕事中、疲れて、ちょっとでもよそ見をしたり怠ければ、死の門の敷居を行き来することになる。鉄柱が適時に立てられなければ、天井から岩が、ものすごい勢いで落ちてきて、落盤事故につながる。落盤事故というのは、作業途中にこの石で形成された地層が落ちることだ。この時、石の塊の間に埋没すれば、鉱夫の生命は脅かされ、機械の作動は中断して、作業はこれ以上できない。

落盤の時、危険な事故が連続的に発生する蓋然性がある。それで、鉱夫は、空気や水の圧力を利用して、採炭期の前進方向の速度に合わせて、採炭時にはすばやく、後部分にシュテムピルをたてなければならない。

採掘場にたてる鉄柱は、高強度の特殊鋼鉄で製作されたもので、製作だけでも多くの費用が必要であるから、鉱夫各自の作業量により、区別して供給され

る。配分された数の中で作業をしなければならないために、前進する採炭機械の後に、その場ですぐ柱を支えるのは難しい。

機械後方に支えられている柱を取り出す間にも、採炭機械は鉱夫らと関係なく前進する。その速度に合わせて、どっしりしている鉄柱を死に物狂いですばやく引いてきて、５、６ｍ前方の採炭時に、すぐに後方に１、２ｍ間隔でたてなければならないが、これが作業の原則だ。炭鉱では原則を守ることができなければ、自分の命を守ることができないということだ。このように鉱夫の一日一日は命を担保として延命されていた。

肉体の疲労と限界とに関係がなく、機械はずっと前進して、機械について鉱夫も休む暇もなく動く。鉱夫は休む余裕がない。単純ながらも、命をかけた作業のおかげで、その時間の間は快感に浸ることができなかったのが、まだ幸いだったのかも分からない。

「よく聞いて下さい。一番後方の鉄柱を槌でドンと打って、取り出す時、その時が重要です。私たちが生きることができる「警戒２号」は後方です。途方もなく大きい塊りが、雷のような音とともに、あっという間に天井で崩れますね。その時素早く逃げなければなりません。どこに逃げるのか、あらかじめ調べて、槌で打つという話です。槌で打ってから、どこに逃げるか考えていれば、すでに状況は終わりです。常に判断をきちんとしなければなりません。天井が崩れる時は、前が見えません。いかに千里眼でも、漆黒の闇の中で、石のかたまりが降ってくる時、目を開いていることができますか？気がつくと、黄泉の国行きです。丈夫な脚で何をしますか？瞬発力！これが石のかたまりの中に閉じ込められない方法です。」このように、鉱山幹部が私たちに注意を与えた。

鉄柱が大きい岩の塊の間に埋まっている時は、どんな手段と方法を使っても、それを引き出さなければならない。鉱山仕事の中で一番難しいことの一つだ。鉱夫ひとりに配られる柱の数が制限されていて、高価な鋼鉄で製作されていて、おろそかに扱ったり、なくせば、一日の日当が飛んで行く。それで、非常に危険だが、いくら暗いすみに押し込まれていても、必ず取り出さなければならな

い。小さい体格の韓国人が、数百kgの重さの石塊りの下に埋まっている40～60kgの鉄柱を取り出すのは、本当に難しい。

鼻タバコの効能

地下で仕事をする間、石炭粉が間違いなく口と鼻を通じてからだの中に忍びこんでくる。いくら吐き出しても吐き出しても、唾と痰には真っ黒な石炭粉が混じる。鉱夫ならば誰でも、肺やあちこちにくっついた真っ黒な石炭粉のために、常に心配がつきまとった。いつ息がつまって死ぬのか、苛酷な後遺症が残りはしないのか、事故に遭わなくても、生きていることができるかどうか、言い知れぬ恐怖に陥る。一生鉱山で仕事をする鉱夫を見れば、明らかに身体の構造が一般の人たちとは違っていると推測する。そのような意味で、鉱夫は数千種類の危険を克服する「地下の英雄」だ。

機械化されたとはいえ、西ドイツの作業環境も韓国と大きく異なることはなかった。坑内はホコリがいっぱいで、石炭粉が飛び散る。世界中どこでも、鉱山は誰でもがいやがる人生の終着点だ。人類を豊かにさせた産業革命も、平均寿命が30才を越せなかった労働者の苦痛なしには不可能だった。

「採掘場人生は底辺人生だ。」と言われるように、人類史が始まって以来、鉱山の仕事は、男性に与えられた最もいやしい仕事だと、西ドイツ人もいう。一生懸命仕事をすればするほど、鉱夫は自分の死が早まる、というアイロニーな存在だ。延長勤務も、良い所だと割り当てられた作業量の達成度も良いが、前がよく見えず、息が詰まる所で仕事をしてみると、からだの隅々はもちろん、内臓にも固くて腐らない石粉と石炭粉が満たされる。熱いから、マスクもまともに使わない。マスクを使わなければ、鼻はまさに詰まって、口中もすぐに真っ黒になる。

そのため、「鼻タバコ」を使用する。これはタバコだがタバコではない。正確には火が不要なタバコだ。鼻タバコは、鼻の穴に挿入できそうな小さい容器の中に入った粉タバコである。鼻タバコを鼻に入れて鼻腔内の粘膜を刺激すれ

ば、すでに吸い込んだ石炭粉が鼻水と共にまた落ちて出てくる。唐辛子粉よりはるかに効果がある。坑内で唯一することができる積極的な救命策だ。鼻タバコで石粉、石炭粉を抜き取る時が、最もすがすがしくて幸せだ。

しかし、鉱夫は長生きが難しい。ガラスケイ酸の微粒子が混ざった空気を長期間吸い込むことによって発症する、慢性疾患の硅肺症や職業病である塵肺もほとんど長生きできず、生きるといっても、一生を病院のベッドに横になって送らなければならない。このような病気は長期間、石炭粉や石粉が肺に積もってできる不治の病だ。結局、肺が縮んで呼吸量が少なくて、息が切れて歩くことができなくて、やっと命だけを長らえる。40年が過ぎた今も、硅肺症で生死の境をさまよう同僚がいる。そのために鉱夫は豚の脂身をたくさん食べる。石粉や石炭粉を除去するのに効果があると信じらているためだ。しかし脂身をたくさん食べると、肝疾患や胃潰瘍にかかったりもした。私も例外ではなく、帰国後、胃潰瘍で苦労した。

グルック アウフ（Glückauf）

「この世に光がなければどうなるだろう？」

地下坑道で仕事をした人ではなくては、明るい空気と日光の、本当のありがたさを理解できないだろう。地下で仕事をして、地上に上がってきてまぶしい日差しを受け、すっきりした空気を吸う時の喜びは、何者にも変えがたい。

一般的な西ドイツの朝のあいさつは「グウテン　モルゲン」だが、鉱山村では、地下の坑道で起きるいろいろな事故で、いつどこで誰が負傷や死亡するかも知れない。そこで、「幸運を持って、上に上がってきなさい」という挨拶の言葉「グルック アウフ！」を使う。ひたすら「危険な地下数千mの採掘場で死ぬことも、ケガすることもなく、無事に地上に上がってきなさい」という願いがこめられた、鉱夫と鉱夫家族専用の大切な挨拶だ。飛行士の挨拶である「グルルィガプ（Glückab）幸運を持って下へ下りてきなさい」と同じ意味だ。そして、昼間でも夜でも、鉱山村の挨拶は「グルック アウフ」だ。

当初、西ドイツ鉱夫をはじめとして、他のさまざまな国の鉱夫とは葛藤も多かった。話が通じない上に、私たちには鉱山経験のない者も多かったので、仕事が下手だったこともある。それも大変だったが、それが原因で、人格的な冒涜にあう時がさらに耐え難かった。

「韓国は、いったいつできた国なの？」「小学校は卒業してきたか？」「よっぽどのことでなければ、男でも最も大変だというこのような鉱山まで仕事をしにこなかっただろう？」こういう話を聞くとき、心中かっときた。それにしても、遥かに遠いところにきて、みたこともない鉱山の仕事を、命を賭けでするのも侘びしいが、同じ境遇の鉱夫が、私たちを馬鹿にするときは、鬱憤が沸き上がった。「Ｘさんたち、君たちはそんなに優秀だったのか？」「Ｘの野郎、雷にでも合ってしまえ。ああしてやめるだろう。」

色々な葛藤と争いも時間が過ぎると、だんだんと減った。ドイツ語の力もついて、作業にも慣れると、すぐに仲間意識もできた。そういえば、同病相憐、国籍が違うだけで、私たちは似た境遇ではないか。

私たちをはじめとする外国人鉱夫たちは、あたかも野戦軍人の宿舎のように建てられた平屋建の建物である、みすぼらしい寄宿舎に住んだ。大きさは５坪程度で、部屋にはベッドと机、椅子、衣装だんすがそれぞれ一つずつあったし、炊事場と浴場、洗面場は共同で使った。

寄宿舎には外国人が集まって住むので、食べ物も非常に多様だった。韓国料理、トルコ料理、イタリア料理、ギリシャ料理など、共同炊事場には多くの食べ物の臭いが鼻を刺す。

各部屋から流れる歌声も興味深くて、理解することができないオーケストラだ。各自それぞれ、自国の音楽をかけて、郷愁をかきたてる。韓国人鉱夫は、朝食には手っ取り早い、麺を好んで食べる。インスタント汁に冷や飯をいれて、キムチとともにがつがつと食べたりもする。西ドイツの人々は、自動車や自転車に乗って出勤したが、私たちは寄宿舎が鉱山の近くにあったので、歩いて行くことができる。明け方５時がすぎに、地下に入る前に服を着替えるため脱衣

場に到着して、挨拶を交わす「グルック アウフ」

パク・チョンヒ大統領の訪問

鉱山での仕事にもある程度馴れ、西ドイツ人の鉱夫をはじめとして、他の国から来た外国鉱夫ともある程度意志の疎通が成り立った。異国での生活は、言葉で表現しにくいほど苦労が多かった。もちろん、仕事も大変だったが、何より家族と故郷を思い出す時、思わず涙が流れた。そうするうちに私たちの鉱夫は自ら歌詞を作って、曲を付けた「鉱夫の歌」を歌った。

鉱夫の歌（西ドイツ派遣鉱夫が作った歌）

１節

異郷の地、遠い道、離れようとしたその日に、希望も膨らんだが、涙があふれたその日に、疲れたからだを抱きしめて、寝床を濡らして涙も乾いた、ため息が佗びしくて。

２節

青い目、黄色い頭、きれいな手助けがあるものの、私のなじんだ両親兄弟、懐かしさに疲れて訴える所なくて、窓開いて涙をあの月に映った顔、青白いね。

その頃、パク・チョンヒ大統領が西ドイツを訪問するという便りを聞いた。1964年12月、西ドイツ連邦共和国のリュブケ大統領の招請で、公式訪問が成立したが、ギリギリの日程の中、パク大統領は、ルール工業都市のハムホン炭鉱、デュースブルクの鉱夫宿舎を視察した。

パク大統領と数百人の鉱夫、看護師との出会いは、1964年12月10日、鉱山体育館で行われた。西ドイツでがんばっている鉱夫と看護師にとっては、一大事件だった。そして大変な期待を持っていた。私たちは三年の契約期間が終われば、その次には何をするかもわからなかったためだ。そのような不安を解消してくれないだろうか、という期待もあったのだ。

パク・チョンヒ大統領夫妻は、鉱夫と看護師の手をいちいち取り、激励の話をしてくれた。愛国歌をみんなで歌うときには、涙々であった。

当時のパク大統領の即興演説の全文は次の通りである。これは当時現場を録音した録音テープのうつしだ。

パク・チョンヒ大統領、西ドイツのハムボルン鉱山訪問時の激励の挨拶

親愛なるティヤフルスト社長、会社幹部の皆さん、そして愛する同胞の皆さん、祖国を離れて異郷の地で、同胞の皆さんとこのようにお会いして、私は感慨無量です。今日この席をお借りして、母国にいらっしゃる皆さんの家族とすべての同胞が、皆さんに暖かい安否のお言葉を伝えてほしい、という願いを、皆さんにお伝えします。

私とその一行が今日こちらを訪問した目的は、今回西ドイツを訪問した機会に、こちらで苦労しておられる皆さんを訪ねて、その間の皆さんの労苦に対して、慰労の言葉を申し上げ、また、本国にある同胞の便りを皆さんにお伝えすることにあります。今回、私たち一行は、西ドイツ政府の招請を受けて、数日前に西ドイツに到着しました。その間、西ドイツの皆さんたちは、こちらにこられた皆さんが、他国からきた方々のなかで、最も模範的で熱心に仕事をしており、会社や西ドイツ政府や、すべての西ドイツ国民から、とても良い評判を得ている、という話を聞き、私たち一行は、大いに喜んでおります。皆さんがこちらに来られて色々な苦労をしておられたのを、私たちはよく知っています。最初、皆さんは、母国のご家族や故郷を思い出され、生活様式がいろいろ違って大変な点が多かったと思います。皆さんがこちらにいらっしゃる間、皆さんが何のために来ているのか、ということを認識して、また、皆さんの後に続いて、我が国の若い青年たちがこれからもたくさんこちらにくることのできる道が開かれているのです。

先に行った方々が最も模範的に仕事をすることによって、西ドイツ政府や会社当局、すべての西ドイツ国民に、韓国の青年たちが模範的ですばらしい、と

いうような良い評判と、そういう前例を残すということは、皆さんの後につづく私たちの同胞に、良い道を切り開き、ひいては、私たち国家の威信と民族の誇りを振りかえる結果になると考えます。

今日、ボンからこちらまで来る途中、沿道の農村から工場地帯、特に今日、世界で最も工業化が進んでいるという、この西ドイツの心臓部であるルール地方一帯に、ニョキニョキ立っている煙突とさまざまな施設を見て、私はいろいろ感じるところがありました。

車の中で案内人が話したことによれば、この工場は今から百年前に立った、また、この工場は今から150年前に立った、その中であるセメント工場は西ドイツで最古の工場だ、などの話を聞きました。

百年前なら、今が1964年ですから、1860年代でしょう。その当時ならば、我が国は李朝末期で、最も政局が混乱していて、国際的に色々な列強の枠組みに挟まって、国家の運命は危機に瀕していた、そのような時期だったと思います。その時、私たちの先祖は、まげを結って、キセルを噛み、広間に座って、党派間のいさかいをしていた時期です。1860年から1880年の時期、第１西ドイツ帝国は建国され、ビスマルクが執権していたのが1871年だと記憶していますが、私たちの先祖は、井の中のカワズのように、世界がどのように変わり、私たち民族の運命を切り開くために何をなすべきか、という、世界のすべての文化が沸き進展する中で、私たちはそこまで悟ることができなくて、今日、祖国の近代化が遅れてしまったのです。私たちがそのように過ごしている時、西ドイツの人々は工場をたてて、機械を作って、産業革命を起こして、この国の工業を振興させて、西ドイツを近代化するのに全力を傾けていましたが、私たちはそこまで悟ることができなくて、遅れてしまいました。そういう結果が、今日私たちの祖国の近代化が先進国に遅れ、いわゆる後進国という烙印が押されることになりました。しかし、今日、私たちの祖国に対して、失望を感じるとか、悲観をするとかは、絶対に必要ないと考えます。私たち国民がまとまって、全てのものを先人からはやく習得し、祖国再建に国民が総力を傾注するならば、

数年の内に、我が国も新しい近代国家に発展できる可能性が用意されているのです。

皆さんがこちらに来られて、炭鉱で仕事をしたり、看護婦として勤務をしたり、また、学校で勉強をしたり、職場で何か仕事を請け、私たちが今日、西ドイツがこれくらい復興することになった原因と、西ドイツ国民の精神姿勢と民族性、こういうものを私たちが習得することができます。西ドイツは、今から20年前、戦争によって完全に灰になった廃虚の上に、今日いわゆる世でいう「ライン川の奇跡」を成し遂げました。今回、西ドイツ政府の要人に会って、「あなたの国はどのようにして‘ライン川の奇跡’を成し遂げたのですか？」と聞きましたら、その方は当然、「奇跡というのはとんでもない話だ。それは私たち西ドイツ国民が、血と汗を流した努力の結果であって、絶対に経済建設に奇跡ということはありえない」ということを異口同音に話していました。

それは事実です。奇跡というのはありえません。人の努力と血の汗を流した代価なしでは、奇跡はありえません。私たちの祖国を再建するとき、私たちと近い友邦国家が私たちを助けてくれたとしても、私たちがもうちょっと豊かに暮らすことができないか、というような他人への依頼心、射倖心、こういうものが、今日私たちの祖国を近代化するにあたって、一つの癌のような要素だと、私は指摘します。もちろん、今後、韓国と西ドイツは国土が分断し、民族が分裂した悲劇、そして民族的な感情など、互いに共通した点が多くて誰よりも深い関心と同情を示してきました。今後、韓・独両国間にいろいろ経済的、文化的、その他すべての面できずながより一層強くなって、より一層良い協力が先送りされることを期待してやまないが、私たち韓国国民は、他人がするのを学び、はやく私たちもそれについて行けるように、自らの精神的姿勢を備えて、私たちが努力をすべきであって、友邦国家に頼って、私たちが豊かに暮らしていく、というような精神はなくすべきだ、とのことです。

今日、西ドイツが復興するのに、自由世界の友邦国家が、初期に色々な援助をしたのも私たちはよく知っています。西ドイツだけが援助を受けたのでなく、

韓国も援助を受けました。ところで片方では、奇跡という名前を聞くことができるほど富強になり、今日、自由と繁栄を享受しているが、私たちは、なぜ、それだけついて行けなかったか？もちろん、色々な条件が違う点も指摘しない訳には行かないが、もう少し国民が気がついて、今からでも私たちが祖国を再建、近代化して、私たちの代には豊かに暮らすことができなくても、次世代、子孫の世代では、他の先進国のように、私たちも豊かに暮らすことができる根拠地を用意するために、子孫のために、何でも犠牲にすべき、という心がけと、精神的な姿勢なくしては、私たちの祖国再建は難しいでしょう。

何度も申し上げますが、こちらに来られて苦労する皆さんひとりひとりの一挙手一頭足がこちらに来ているすべての外国の人はもちろん、特に西ドイツ政府当局または会社の方々が、皆さんの行動に注目することであり、一人の分別ない行動が、個人の誤りとしてではなく、韓国の人全体の評価となるのです。

我が国の名誉と民族の誇りのために、また、私たちが再び帰国して、祖国再建に、真の働き手になることができるように、皆さんの実力を向上させるために、皆さんが自重自愛して、特に健康に気を付けて、ここで仕事をする間には、無事に、また元気な体で生活して帰国されるように、切実にお願いするところです。

皆さんのこれからのご健闘を、祈念してやみません。特にこの席で一言申し上げたいことは、炭鉱で仕事をして、最近事故で犠牲にあったお二人の英霊に対して、心より哀悼の情を表わすところです。ありがとうございます。

これに対して鉱夫代表であった第１陣のユ・ジェチョン氏が答辞をした。

尊敬する大統領閣下.

五千年の歴史の光る継承のために、到達できる極点の祖国の運命を双肩に担い、日夜奔走されているにも拘わらず、こちらまで私たちに会いにきて下さったのに対し、無限の敬意を表わすところです。

敬愛する大統領閣下.

今日閣下と、異国万里のこの土地でお目にかかると、あたかも父母に対するように感慨無量です。私たちが第1陣で、閣下をはじめ国内の総耳目を集中した関心の中で、こちらにきて一年の歳月が流れました。韓民族と別段接触がなかった西ドイツ国民の関心の中で、私たち一同は、私たちに対する期待に違反がないように祖国の名誉を念頭に置いて、すべての難関である逆境をはね除けて、他の国の人に決して負けないために、全力をつくして、大過なしで健闘していくことは、ひたすら閣下をはじめいつも色々な国民が心配して下さる恩恵に浴します。

慈愛深い大統領閣下.

今祖国は魔の155マイル休戦ラインで分断され、経済的に後進性と貧困の中で、今日より明日を指向する再建の鼓舞する意欲の中に、燃えていることを、こちらに来た私ども同志一同、やはりその意義を敬って、後進国の枠から脱しようと、今日より明日、いや三年後の帰還の光栄を指向して、すべての逆境と闘っています。今後も閣下と国民の期待に背かないように、より一層奮闘することを誓いながら、異国の空の下、数千mの地下で、血と汗に変えた私たちの外貨が、祖国繁栄の礎石となることを期待し、閣下のご健康と共に、祖国の無限の発展と､栄光が宿ることを祈ります。そして､私たちが念願してやまなかった、次の建議事項に対し、閣下の特別な配慮がいただけますよう、お待ちしています。

第一に、三年後、西ドイツからの帰国者に対して、適切な職場の斡旋を要望します。

第二に、血と汗で得た私たちの外貨送金に際し、為替レートに特別な恩恵を与えてくださるようお願いします。

第三に、三年の雇用期間満了後、希望者に対しては、西ドイツでの就職が可能となるような処理をお願いします。

第四に、帰国時、こちらで使った日常生活に必要な家財道具の、無税搬入措置を望みます。

第五に、早急に、国際労働機構に加入するように推進してください。

第六に、異国で孤独にすごす、私たちの収入を保障する上で、労務官の早急な西ドイツ派遣を切実に要望し、建議します。

最後に、取るに足りない品ではありますが、私たちの誠意として、鉱山を象徴する鉱夫の安全を確保する鉱山安全灯を、閣下に寄贈します。私たちの誠意の象徴であるこれを眺められるたびに、西ドイツで健闘している私たちを記憶して下さり、より一層の愛と支援を施して下さることをお願いして、無事の帰国をもう一度祈念して答辞といたします。

鉱夫代表　ユ・ジェチョン

イ・スンニョン氏の著書『私の美しい縁』（2001）によれば、鉱夫代表の答辞が終わるとすぐに、パク・チョンヒ大統領は席から立って、「今の建議事項で、政府として処理できるものは、私が戻ってすぐに処理します。そして、西ドイツ政府と交渉して処理できる問題は、西ドイツ政府と十分な協議を経て、最善を尽くします」と答えた。

パク大統領の訪独の影響は侮れなかった。故郷への思いはつのっていったが、祖国の名誉を担って産業戦士として三年間誠実に仕事をしなければならない、という責任感も湧き上がった。その後、鉱夫の出稼ぎは、十年近く続いた。西ドイツ派遣鉱夫は、祖国が貧しい時期、勤勉に仕事をして、韓国人としての自負心を高めた。

苛酷な日常

鉱夫の日常は変わることがない。朝早く起きて、採掘場に入って行き、帰ってくる生活の繰り返しだった。鉱山仕事に適応するのに大変な思いをしていたら、いつのまにか１ヶ月がたち、初めての給料を手にすると、感慨無量だった。だが、喜びもつかのま、その金は私のものではなかった。西ドイツに来るまでどれくらい多くの人々の助けがあったのか。特に、牛まで売って費用を工面し

てくれた兄の恩を忘れてはいなかった。「兄さん、イチョンが送る初めての月給です。本当に感謝します。これから給料を送金しますから、少しだけがまんして下さい。そして母に、私が帰るまで、健康に気を付けて、とお伝えて下さい。」私の手紙に返事がきたが、家族はいつも喜びと温もりを伝える。母のぬくもりが感じられるようなやわらかい心づかいを、胸にいっぱい受けた。

「ギリギリの農村暮らしだが、私たちは幸せに元気に暮らしている。こちらの心配はしなくて、お前は健康に気をつけなさい。鉱山の中はひどく熱くてホコリも多くて息をすることも大変だし、落盤事故やガス爆発の危険もあるというから、お前が無事に帰ってくる日だけを指折り数えている。鉱山事故のニュースがあるごとに、家族皆が心配している。」

家族の素朴な顔を思い出し、すぐに涙が流れた。西ドイツにくる時、作った借りをはやく返してこそ、心の荷を減らすことができるようだ。私一人だけ苦労すれば良いのに、家族までできないことさせたようで、心が痛かった。

給料の大部分を故郷の家に送ると、大して多くないお金で生活をしなければならなかった。しかも大口の定期積立にまで入ったせいで、西ドイツの三年間、私はいつもぎりぎりの生活をしていた。

食料品店などで、ツケで物を購入することがしばしばだった。支払いは後で、先に物を購入することが、西ドイツ人の常識では理解できなかっただろう。西ドイツにはそのような制度がなかったために、ツケを願い出ることが、初めはとても恥ずかしかった。ところが、それも１、２ヶ月過ぎると、図々しくなったというか、ふてぶてしく笑って要求ができるようになった。初めは苦々しく思っていた西ドイツ人店主人も、数か月繰り返すと、と笑い流してくれた。西ドイツにそれまでなかったツケという制度を、韓国の鉱夫が伝えたわけだ。

だが、西ドイツ鉱夫生活三年間、事情は少しも好転しなかった。契約期間が終るまで、たまった借金はなかったが、常にお金で悩まされ、爪に火をともすようにして、まともに食べることもできなくて、結局体を酷使させて過ごした。幸い、私が送った給料で、故郷の家は借金も返して、再び畑も確保することが

できた。

たとえからだはくたくたで、生活は大変だったが、故郷の家が豊かになればなるほど、心は安らかになった。「勤勉、誠実、節約」は、まさに西ドイツでの私の生活を表わしていたし、今でもこれを座右の銘としている。

生活苦に苦しめられた私は、私たちより先に来ていた１陣の先輩を訪ねては、アルバイト先の紹介をお願いした。すぐに、働き口があるという、うれしい知らせがきた。先輩が仕事をするりんごの卸売商で、時間制で仕事が出来るようになった。

午前中には鉱山の仕事を終え、延長勤務がない日は、午後４時から夜９時まで５時間ずつ仕事をした。時給３マルクずつで、一日の日当が15マルクであったから、１ヶ月に100時間仕事をすることになれば300マルクの副収入を上げることができた。鉱山の給料が600マルク（当時韓国通貨換算で約18万ウォン）であったから、副収入にしてはかなり割のよい方だった。その金額で、韓国では米10袋を買えたし、当時の公務員たちの８倍にもなった。

韓国で一戸建て家屋が、ソウルでは100万ウォン、全州では50万ウォンという時期であった。とにかく、私は休む暇もなく、延長勤務をして、他でアルバイトをしたおかげで、他の鉱夫のほぼ二倍も多い収入をあげることができた。

その時アルバイトをしたおかげで、西ドイツのりんごの品種を結構わかるようになった。

「残ったリンゴは、食べたければ食べてもよいよ。」と、りんご卸売商の主人は、やさしかった。傷があったりして売ることができないりんごは、持っていっても良いといってくれた。有難いことこの上なかった。

お金をさらに稼ぐ、という欲のために、延長勤務にりんご農場のアルバイトまでをした私は、体重が激減した。仕事の虫だと指差されてもなんともなかったけれど、このようにやせると心配が生じた。「体が財産なのに、健康でなくてはいけないよ。」休日勤務を自ら買って出て、必死に仕事をする私に、同僚の鉱夫が言った。

まさにそのとおりだ。私は金を儲ける以外、何の関心もなかった。同僚の鉱夫の中には、延長勤務をする人もいることはいたが、ヒマがあると、近隣のヨーロッパへ旅行をしたり、ガールフレンドと付き合うこともあった。

「事故だけにはあうな。病気で寝付いてもだめだ。韓国に帰る日まで、一生懸命に稼いで、金持ちにならなくちゃ。その後は新しい人生が待っているから。」

第３章　大学教授になった西ドイツ派遣鉱夫

鉱夫の勲章「石炭入れ墨」

鉱夫の24時間は緊張の連続だ。四方を死の恐怖に囲まれて、常に手をふれるところに神経を尖らせる。埋没だけでなく、ガス爆発、水路管破裂などの事故が常に発生する。その上、すべての作業道具が西ドイツ人仕様であるから、体力が弱い我々外国人はよくケガをした。

小さい事故は、それでも笑い流すことができた。爪がとれるのはまだましで、手足の指のない同僚も多かった。西ドイツ派遣鉱夫の障害者協会までできたほどだ。私も体に傷は多いが、それでも四肢は完全だから、まだ幸せだ。

「クォンさん、結婚したら、新婦がびっくりして逃げるよ。体中にまだらに入れ墨してると思われてね。」１日の日課が終わって、シャワールームで、鉱夫同志がお互いの体を見て、悲嘆混じりに笑い合った。時間がたつにつれて、石炭の入れ墨は増えていく。小さいものは１センチから、大きいものは４、５センチまで大きさもいろいろだ。私の体だが、この入れ墨が、次にはどこに掘り込まれるか、私にも分からない。落ちてくる石炭だけが知っている。あっという間に落ちてくる鋭い石と、石炭粉を避けることはできない。安全帽をかぶって安全靴を履いたが、それだけでは体全体を保護できない。蒸し暑さに絶えられず、作業服の上衣を投げ捨てれば、裸になった体は無防備となる。小さい刃のようにとがった石の断片に、一方的に攻められて、何の予告なく、腕や背中など、顔の皮膚の上に、石の断片がささった瞬間、皮膚がむけて出血するし、時々は膿んでしまう。一度できた傷が治る前に、また新たな傷ができる。

だが、それよりさらに恐ろしいのは「入れ墨」だ。できた傷の上に、いつの間にか微細な石炭粉が入り込む。人間の体は、自らの損傷した細胞をはやく治すため、直ちに反応する。石炭を含んだまま皮膚組織が再生して、傷を閉じる。そのようにして、鉱夫の体には石炭の「入れ墨」が増える。私たちはこれを「鉱夫の勲章」と呼んだ。体にできた入れ墨は、心の片隅の佗びしい傷跡でもある。

１、２ヶ所できた青黒い入れ墨をなくそうと、私たちは皮膚がむけて出血するほど、無理やりこすった。地下では石炭の塊りを掘り、地上では皮膚を掘り、石炭粉を引き出す。

産業戦士の入れ墨が誇らしいとはいうものの、私たちは、三年の契約期間が終るまで、体に打ち込まれた石炭粉を掘りおこすのに一生懸命だった。時には、顔にも大きい傷ができることがあった。私の唇の左側の下にできた、４、５センチの青い入れ墨は、幸運にも何年かするうちに小さくなったが、触ってみれば、今でも肌には依然として黒い色が残っている。

事故は誰にも避けられない

1965年６月30日、西ドイツにきて８ヶ月が過ぎ、その日も気持ち良く出勤した。延長勤務のためにパンと水をたくさん準備して行った。

「グルック アウフ！」と、同僚とお互いの安全な帰還を祈るあいさつも忘れなかった。しかし、予測不な事故にあってしまった。延長勤務が続き、疲れた時、それは起きた。

作業中に、頭上の岩の山が崩れ、私を襲った。予想もつかない落盤事故であった。幸い、頭は丈夫な安全帽が守ってくれたが、左手の平はそうはいかなかった。途方もない重さの岩の下敷きになり、厚い革製の作業手袋も効果がなかった。手袋の中の手が、無茶苦茶にこねられてしまった。私は悲鳴をあげた。手に切られるような痛みが襲った。私は衝撃と恐怖で全身が震えた。出血と痛みのためにわけがわからなくなった。悲鳴を聞いて、近くにいた同僚が、あわてて駆け付け、私の姿を見て、非常ベルを押した。

誰かの足音が聞こえるようだった。岩の塊りから受けた衝撃と大量の出血で、精神はますます混乱していった。

応急処置班が到着して、坑内で簡単な処置をした後、担架にのせられて地上に私を運んで行った。

鉱夫専用病院に入院した後、精密検査をして、何回も大手術を受けた。西ドイツ人医師は私の手がどうなるのか、明らかにしなかった。ただし、経過を見守るため、しばらく入院するように勧めた。

病床にいる間、金を稼ぐことができない、という思いでせっぱつまった。あれこれ考えながら病床で１ヶ月間すごした。外国人医師と看護師が、親切に治療して世話してくれたが、私の悲しみまで治癒することはできなかった。同僚が時折訪ねてきては、色々な話と故国の便りを聞かせたが、私の孤独は慰められなかった。入院中にも、勤務手当てはもらえたが、入院期間が長くなるほど金額は減っていった。

仕事ができないことで生まれる焦燥感と、韓国の家族に対する罪悪感、そして未来に対する不安などで、私はしばしば悩んだ。鉱山病院の入院生活は、暗黒のような日々であった。

数十年が過ぎたけれど、今でもケガした左手は力が殆どなくて、げんこつを握ることができない。鉱山の贈り物である傷跡が、まだ手の平にそっくり残っている。

親切なマイスター

退院後、まもなく鉱山仕事に復帰した。事故から約１ヶ月がすぎていた。仕事を再開する時、地下に降りて行くのが、ちょっと怖かった。鉱山では事故が頻発するためなのか、私が作業に復帰しても、西ドイツ鉱夫や韓国鉱夫も、黙ったままだった。シュータイガー（監督官）とマイスター（作業班長）の配慮で、軽度の仕事から始めて、強度に移っていった。気楽で容易な仕事のため賃金が安かったが、健康回復が優先なので、幹部の決定をあえて受け入れた。

久しぶりに朝班に配属された。また、昼と夜が変わったからなのか、体がけだるい。やっと１日の勤務を終える頃、地下250mの鉱山での作業を直接支援する中間幹部マイスターが「今日、延長勤務は可能ですか？」と聞いてきた。

延長勤務は、鉱山の作業状況によって、監督官や作業班長が指示したり、鉱夫が自発的に申請することもあった。たくさん稼いで、１日もはやく貧困から抜け出したいという欲のために、私は延長勤務をしばしば申請した。延長勤務をすると、１日16時間労働となり、二倍の賃金を受けとることができる。

いくら作業班長が薦めても、西ドイツ人は、本人が嫌ならしない。だからといって、不利益を被ることもない。西ドイツ社会では、老若男女問わず、全て本人の意志を最大限尊重する。

ところで、その日に限って、私は食べるパンも水もたいして持って来ていなくて、作業班長の問いかけに対して、確実な返事ができなかった。

１ヶ月間入院していたせいなのか、体調はまだもとには戻っていなかった。ぐずぐずしていると、シュタイコがきて、そんなに難しいことではないから延長勤務をしろと薦めた。シュタイコはマイスターの助手である。監督官は私をよく知っていて、事故の後には気楽で安全性の高い仕事を配分してくれたし、東洋人だと差別することもなかった。熱心に仕事をする人には、それに合う待遇をしてくれたから、私はいくら疲れても、彼の勧誘はほとんど断らなかった。私が、三年間の鉱山勤務を無事に終えることができた理由の一つとして、親切な監督官が三年間、変わらずに人間的な待遇をしてくれたことがあげられる。初めての仕事では、非常に難しいことが割り当てられたが、三年目の古参になると、監督官は、外国人労働者の私に、多くの気遣いをしてくれた。そこで今日は何の準備もなしに延長勤務に出た。気は進まなかったが、監督官の勧誘でやむなく行ったので、気が重い。こういう日は、強い精神力がないと、16時間の労働を持ちこたえるのが難しく、やっと仕事を終えて、すきっ腹をかかえて、ようやく地上に這い上がった。

「すみません！パンと水ください！」と、すきっ腹をかかえて食料店に飛び

込んだ。今までにこんな空腹の経験はなかった。他人の目も気にせず、がつがつとパンのかたまりを、あっという間に呑み込んだ。延長勤務をした翌日は、体が鉛のようだった。だが、いくら疲れても、夜明けに起きて鉱山に行かなければならない。簡単な朝食を食べ、仕事場に出て行く。今日に限って同僚の足取りが軽く見える。ぞろぞろと鉱山に出勤するときは、常に元気がよい。誰にいうともなく、「今日も無事に」という挨拶をする。監督官が私の場所まで来て、危険があるかどうかを直接点検した後、仕事の手伝いをしてくれた。こういう日は楽しく仕事が出来る。時には、監督官の暖かい気使いに、涙がにじんだりもする。見ず知らずの外国人労働者を、自分の同僚のように見てくれる心使いに、驚く時もあった。良い監督官に会えば、良い待遇を受けて、楽な仕事場に配置されたりもした。監督官が鉱夫にできることは、もしかしたらそれが全部かも知れない。危険がない場所、作業中でも休める場所に割り当てて、情報を適時に知らせること、それが全部であっても、誰でもできるわけではない。

私がそのような待遇を受けることができたのは、鉱山で、時々韓国から持ってきたドイツ語の本を広げて、勉強していたためであったのかもしれない。石炭粉と汗の雫でぐしゃぐしゃになったが、その本は今でも大切に持っている。

鉱夫の休日

「クォンさん、中古車買ったから試乗しない？一緒にオランダへチューリップ見物でも行こうよ。」と、週末になると同僚が誘いに来た。行きたいのはやまやまだが、私は体力がなく、平日の仕事だけでもくたくたに疲れたから、週末は寄宿舎に閉じこもった。とにかくゆっくり寝ていたかった。近隣諸国へ長距離旅行に行った同僚もいたが、余裕ある休日を楽しむことは、まれだった。大半の人たちは韓国の両親や妻子のために貯蓄をしたり、西ドイツ留学の準備のため、費用を稼がなくてはならなかったためだ。私たちの生活は常に世知辛かった。

異国での最大の楽しみは、何といっても食事の用意だった。普段は忙しくて、

調理できなかった韓国料理を作ることだけでも幸せだった。頻繁に作って食べたメニューは、豚の脂身を混ぜたキムチチゲだ。

豚の脂身をたくさん食べると、体に打ち込まれた石炭粉と石粉が抜け出ると、鉱夫たちは信じていた。また、豚足や牛の内臓、牛の頭も同じように韓国式に料理した。

西ドイツ人はこういうものを絶対食べない。家畜の餌に使うものを平気で食べる韓国人たちは、頭が変だと考えたが、私たちにとっては、安値で買えるため、有難かった。しかし韓国人の需要が次第に増えたため、豚足と牛内臓の値段も上がり始めた。

共同でキムチの漬け込みをする日、鉱夫の寄宿舎はお祭り気分だった。西ドイツに韓国ハクサイを持ってきたのは、私たち鉱夫だった。それ以前、オランダが韓国ハクサイを輸入したが、韓国ハクサイの種を西ドイツに植えて、試行錯誤しながら、韓国固有のハクサイの栽培に成功したという。その後、韓国鉱夫らと看護師によって、ヨーロッパ全域にハクサイが伝播したし、大量生産するハクサイ畑が出現するに至った。韓国ハクサイは、西ドイツハクサイに比べて、葉っぱが大きく水分が多くてキムチを漬けるのにぴったりで、いつまでもその味と新鮮さを保つことができる。

今では、西ドイツのデパートどこでも韓国ハクサイが売っていて、コチュジャン、ワカメ、塩辛のような各種薬味とおかずも、西ドイツ全域で購入することができるようになった。韓国の食品だけを売る店や、韓国飲食店も増えたが、このような店は、派遣鉱夫のため作られたのだ。

派遣鉱夫と看護師のおかげで、ヨーロッパ社会では、最初でそして最も広範に、西ドイツ韓国人社会が根をおろした。数十年が過ぎた今でも、西ドイツの飲食店や食品店のいくつかは、鉱夫と看護師の出身者が経営している。

互いに散髪をして

同僚は来た当時、同じようにお金もなく、時間もギリギリだったが、いろい

ろおもしろい思い出を作ってくれた。遊ぶこともせず無愛想だった私を、いじめもしないでいろいろと気遣ってくれた同僚が有難かった。

休日には休息を取りながら、次の週の準備をする。散髪やたまった洗濯もして、栄養の補充もする。散髪は交代で髪を刈りあうことにした。暖かい日差しが降る草むらに椅子を一つ置いて、首には安風呂敷をまいて、髪を刈りあって笑っていた。

時間があれば、森や小麦畑、大麦を干した中のきれいな空気と日光を楽しんだ。常にまっ暗で空気が汚れている地下で石炭粉に囲まれていると、このようにでもしなければ自分が生きている、という確信がもてなかった。

故郷の懐かしさを慰めるのに、歌ほどよいものはない。私も含めて韓国鉱夫は、大いに歌を歌った。作業をしながら口ずさんだり、仕事から帰ってきて、夜空を眺めながら、合唱もした。そうするうちに、抱き合って涙を流すこともしばしばだった。

ワラビを採って手錠をかけられ

事故の後、健康管理を徹底した。夏には屋外プール、冬には室内プールを探して、石炭粉で汚れた肺を、回復させるための努力をした。昔から水泳が好きなうえに、西ドイツではどこにでも室内・外プールがあり、時間があるたびにプールを探して歩いた。

西ドイツの山には、ワラビがたくさんあったが、誰も食べなかった。ただし、第２次大戦以後、やむをえず食べたこともあったという。しばしば、韓国の鉱夫と看護師は、西ドイツでワラビ採りをした。彼らは、ワラビを採取した後、よく乾かし、包装して韓国に送った。

ある日、同僚らと尾根に座ってワラビを熱心にとり、袋に入れているとき、パトカーがサイレンを鳴らして走ってきた。西ドイツ警察のサイレンの音は、我が国よりは音がはるかに大きい。図体の大きな西ドイツ警官が数人現れて、私たちを囲んで、「あなた方は自然を傷つけたので、刑法の罪で処罰を受けな

ければなりません。警察署に行きましょう。」と言った。そのことばに、私たちはそれぞれ言いかえした。「何でこんなことで、私たちが警察署まで行かなければなりませんか？」「山にある草を、ちょっと採ろうというのに、それが何の罪ですか？」「ワラビは、韓国人が好きな特別な料理の一つです。健康に良いよ。私たちは、絶対に自然を傷つけたりしていません。ただ、ナムルを採っただけです。」等々、くやしくて、下手なドイツ語で抗議をしたが、まったく効果がなかった。結局、私たちは警察署まで行って、「再び、山に行ってワラビを採らない」という覚書を書いて、やっと解放された。

私の特別な休日はそのように幕を下ろした。しばらく韓国鉱夫の間には、私たちが体験した「ワラビ事件」が話題にのぼった。西ドイツ人の自然保護の意識が非常に高く、徹底していることだけは事実だ。

ソーセージと乳房、そして生ニンニク

ワラビ騒動の後、同僚らと飲食店に行くことになった。西ドイツは、ソーセージの種類だけでも300種類を越える、世界一のソーセージ生産国だ。バイエルン地方の代表的なソーセージは太くて白い、ニュルンベルク地方のソーセージは、主に焼くので、小さくて細くて色はやはり白い。フランクフルトのソーセージは、ウィンナソーセージとも呼ぶが、湯がいて食べるし、赤いボックソーセージも有名で、からしをたっぷりつけて食べる。

飲食店に入ると、女性従業員が「何を召し上がりますか」と尋ねた。「ソーセージを下さい。」と、正統なドイツ語を駆使するため、一生懸命舌を転がして答えた。ところが、注文を受ける女性従業員の顔が赤くなり、私たちのテーブルの前に立って微動もせず、気分の悪い表情をつくるのではないか。私たちは、再度勇気を出して「ソーセージをください！」と注文した。すると、女性従業員は主人のところへ行って、指で私たちのテーブルを示して何かいっていた。しばらして食べ物が出てきたが、私たちは気楽に食事をすることができなかった。久しぶりに外食をしようとしたのに、なぜサービスが悪いのか、訳が

分からなかった。

ところが、後で分かってみると、私たちの発音に問題があった。ソーセージを意味する「ブルストゥ」を、誤って「ブルーストゥ（乳房）」、つまり、女性従業員に、「あなたの乳房をください」といったので、あきれられたのだ。それも真昼間から、たくさんの男たちが、無表情にしつこく言ったので、悪ふざけと誤解されたのだろう。

ドイツ語のWとB、FとP、RとLは明確に区分して発音するのが難しい。私たちは私たちで、その西ドイツ女性従業員が不届きもので再びこないと大騒ぎしたし、女性従業員は私たちが食堂を出て行くまで、不快な表情をつくっていた。

寄宿舎に戻ってから、事務室から私たちに呼び出しがかかった。行ってみると、さっきの飲食店から抗議の電話がきたのだった。発音一つのために、私たちは、「無礼な国民」になったわけだ。

話のついでに、食べ物に関連した習慣の差をもう一つ上げておく。西ドイツ人は生ニンニクの臭いを非常に嫌う。それで、ニンニクを好んで食べる韓国人との摩擦がたびたび起きる。生ニンニクを食べた後、鉱山へ行くと、服を着替える間でも、十人余りが共に乗る狭苦しいエレベータ内でも、坑車に乗るときでも、常に西ドイツ人は私たちのそばに絶対こない。生ニンニクを食べて車を運転して、交通信号に違反しても、西ドイツ警察はその臭いのために、罰金ステッカーを切ることができないほどだ、といえば嫌いな程度を伺い知ることができるだろう。

私が鉱夫宿舎で、故郷の清麹醤（チョングクチャン）を沸かしたため、西ドイツ住民の訴えで警察が出動したことがあったが、悪臭が出るという理由であった。

西ドイツに来た韓国留学生も、ニンニクの臭いのために、大変な苦労をするという。数百人が共に講義を聞く広い大学講義室で、西ドイツ人はニンニクの臭いを、珍島犬以上に識別する。東洋人の中で、誰か生ニンニクを食べて講義室に入ってくれば、鼻を覆って出ていく西ドイツ学生もいる。それのみならず、

数十m離れて講義する教授も、「誰かニンニクを食べて来た学生がいますね。今日はとても講義はできません。諸君、またお会いましょう。」と講義を中断して行ってしまう。または、「君、ニンニクを食べてきたのかね？出て行きなさい。」と言われ、その学生は、講義室から出て行かなければならない。単純な食べ物文化の差から始まったことだが、時にはこのように侮辱を受けたりもする。当然くやしい。その臭いのために、講義も聞けず、皆の前で追い出されるのだ。私たちも、腐ったチーズの臭いは嫌いだから、全く同じじゃないか、とも思う。

ところで、私たちが朝鮮戦争を体験したように、西ドイツも世界大戦で敗北した後、全国土の80%以上が破壊されて、想像できないほどの貧困と病気、飢餓に苦しめられたという事情を知るようになったので、私は、同病相憐の心情で、西ドイツ文化を肯定的に受け入れようと努力した。彼らの文化を理解すれば、多くの文化的差異を認めることができたし、また、ありのままを受入れると、多くの西ドイツ人と知り合う機会ができた。

西ドイツ ホームステイ

韓国の鉱夫だけで過ごすのもおもしろいが、西ドイツに来て二年目になると、西ドイツ文化や西ドイツ人の日常も気になり始めた。自分だけでなく、多くの同僚が寄宿舎生活をやめて、鉱山付近に小さい部屋を借りて独立し始めた。枠にはまった寄宿舎共同生活から抜け出して、個人的に余裕ある生活を楽しみたかったようだ。

もちろん、初めはちょっと不安だったが、西ドイツ生活二年目、私は寄宿舎から出て、西ドイツ人鉱夫の家の２階に部屋を借りて、新しい生活を始めた。環境が変わると、違った楽しみがある。

外国人たちと一つ屋根の下で過ごすことが、初めは不慣れであったが、すぐに新しい家族に馴染み、楽しい生活が始まった。西ドイツで二年近く生活したが、彼らの文化に慣れることは容易でなかった。近くで生活をみると、驚くこ

とが一つや二つでなかった。西ドイツでは、夫人が忙しかったり具合が悪ければ、夫がすべての家事をする。清掃、洗濯、そして買い物をして、料理をしながら子供の世話まで、家族の構成員として、自ら仕事を探して行うのだ。とにかく、今でもこの家族の親切を忘れることはできない。その親切のおかげで、西ドイツ文化やドイツ語を習得できたし、黄色い頭や青い目も、良く見えるようになった。

ドイツ語の勉強

軍隊時代でも他の仕事でも、職場に出るときはいつも本を手に持って通った。知識を得たいという欲求があったからで、西ドイツでも同じだった。地下深い暗い鉱山でも、安全帽にかかった薄いランプに頼って本を読んだ。ドイツ語辞典と外国人のためのドイツ語教育書、ドイツ語単語帳もいつも持ち歩いたから、本に石炭粉が混ざり、真っ黒に変わった。そのため残念なことに、辞典を全部覚えることはできなかったが。

鉱山で仕事をすることだけでも、心身ともに疲れてしまうのに、アルバイトもすれば、ドイツ語の個人授業まで受けていた。独学ではもの足りず、鉱夫一年目の時、小学校の教師を紹介してもらい、40マルク（当時の換算率で2000ウォン）を払い、週一回、個人授業を受け始め、二年以上続いた。その結果、私は他の鉱夫とは違って、西ドイツ人と日常的会話には不便を感じないほどドイツ語の実力が伸びた。

同僚は、私が生活費にことかき空腹をかかえながらも、鉱山仕事に不要なドイツ語を習うためにお金を使うのをみて、むだなことか、もしくは西ドイツ留学が目的で鉱夫を志願したのか、と思っていたかもしれない。

西ドイツの女の先生からドイツ語の個人レッスンを受けた私は、つたないドイツ語だったが、日曜日には教会に行って、西ドイツの子供たちを教えた。幼いころから先生になりたかったので、機会が与えられれば、どんな形でも学生たちを教えたかった。日曜学校の教師として子供たちと過ごし、教会へ行った

後、また、ドイツ語個人レッスンを受けた。同僚が遊びに誘っても上手に断った。

ところで、私は、何かを学んで身につけるということが生来、合っていたようだ。始めたことは終える性格だし、分からないことを習う間だけは、肉体的苦痛と郷愁からも逃げることができたからである。

鉱山勤務が終了間際、他の同僚とともに私も、帰国すべきか、または西ドイツで何かできないか、と考えた。西ドイツに残って何かをするためにドイツ語を勉強したわけではないが、私は鉱山勤務を終える日まで、しばしばドイツ語の勉強に、多くの投資をした。こうしたドイツ語の勉強が選択の幅を広げたし、勇気を与えたし、私の人生の元手になった。

なつかしい少女ヘルガ

西ドイツにきて一年になる頃、同僚鉱夫の紹介で西ドイツ人の家族と知りあい、そこの娘で14才の女子学生ヘルガと手紙をやりとりしたり、電話で話をした。ドイツ語の個人レッスンは珍しくて受講料も非常に高い。しかし、私は運良くヘルガの家族に会い、そのたびごとにドイツ語辞典と本を広げて、いろいろ質問ができた。それと共に、ドイツ語ばかりでなく、西ドイツ文化に対しても目を開き始めた。ヘルガの家族との偶然の出会いが、私が西ドイツに留学した契機になったということもできる。

私がたどたどしくドイツ語を習う時、親切に教えてくれた「少女先生ヘルガ」は、日記帳に挟まっている遠い記憶の中の写真のような、なつかしい存在だ。中学生である彼女は、私を実の兄のように慕い、心を開いて純粋な姿で接してくれて、西ドイツ社会に適応する大きな助けとなった。西ドイツがこんなに親切な国だということを教えてくれた少女、西ドイツを第二の故郷だと、ためらいなくいえるのも、全てヘルガのおかげだ。

彼女が私に投げた言葉が、つらい私の異国生活にやさしさと勇気を吹き込んでくれたし、西ドイツで勉強できる土台をも用意してくれた。三年の鉱夫生活で得た最も大きい慰めの贈り物は、少女ヘルガだ。

彼女と兄のマンフレッドとは気が合い、三人でしばしば会った。彼らは、私の素晴らしい先生であり、ガイドでもあった。マンフレッドのフォルクスワーゲンに乗って、西ドイツやフランスなどを旅行したり、時にはヘルガと二人でアーヘンの市内を見物もした。ヘルガの家族は、皆、私を家族のように扱ってくれた。その時の縁で、今までヘルガとは連絡をやりとりしている。

ときめくイタリア旅行

二年目になった頃、旅行社を通じて、私たち鉱夫は韓国人看護師と共に、イタリアに旅行することになった。

帰国が近づいても、私はお金が惜しくて、その時まで海外旅行に行きたいとは思わなかったが、中古車を持っている同僚は、イタリア、フランス、スイスなど近い国々を旅行してきては、自慢していた。そのたびに、私も帰国前にはどうにかして行きたい、と考えた。

私は、期待と好奇心で、最後のチャンスと考えて、イタリア旅行に参加した。イタリア、ミラノから、ピサの斜塔、ローマ、ボンペイ、ナポリとカプリ、ヴェネツィアを経て、アルプス山脈を越えて、西ドイツに戻るコースであった。
イタリア旅行を終えて、スイス、アルプス山中のユングフラウを見物した。四季を通して、雪の花を鑑賞できる世界の屋根で、70 ～ 80度傾斜した場所を、汽車に乗って上がった。

銀色に覆われた雪国の神秘と、人間が成し遂げた技術と創意の前に、開いた口が塞がらなかった。

その後も休暇を利用して、同僚と10日間、自転車旅行に出発することもした。ヨーロッパの国々は、自転車道路が整備されていて、中北部西ドイツとベルギー、ネーデルランド、デンマークはほとんど山がなく、気楽に行くことができた。テントの中で夜空を眺めると、過ぎ去った記憶が次から次へと浮び上がる。もう戻る日も近くなった。

帰国を控えて

1967年、西ドイツにきて三年が過ぎた。鉱夫たちは、一部は帰国、一部は西ドイツに残り、また一部は米国やカナダなどに移民する準備をしていた。私は帰国すると決めて、家族に配る簡単な贈り物を用意していた。西ドイツ鉱山で三年を無事に終えることになったことは神様がくれた贈り物だ。元気な体で故国に戻ることができて幸せだ。

あちこちで酒杯あたる声とてんやわんや騒ぐ声が、年末であることを知らせる。西ドイツ人は皆が健康で家族に再会することができて、嬉しくて浮き足立っていた。家族と親戚一同が集まって、酒を酌み交わし、一晩中まんじりともしない西ドイツ式忘年会は、非常に騒々しい。私たちには、ほとんど理解できない。ここで私たちが異邦人であることを悟るのだ。

私はドイツ語の勉強をしながら、韓国人留学生を紹介され、自然に留学に対する情報も得ることになった。帰国日が近づくと、私の進路を心配してくれる韓国人留学生らが、「クォンさんも、西ドイツに残って勉強されたらどうですか？私たちが、できるだけ助けてあげますよ。鉱山に来られて、残って勉強される方も１、２人ありますよ。」と申し出てくれた。私も、「そうですね。帰る前までに考えてみます。」と答えるしかなかった。

しかし、私の境遇からすれば、明らかに韓国に戻らなければならなかった。留学生は、みんな金持ちの家の子で、高位の公職者の子供で、韓国の名門大学生出身だった。そうなると、韓国で大学も出てこない私が、留学するということはまったくお話にならない。

どんな決心もできないまま時間だけが流れた。帰国一年前から、鉱夫の最も大きい悩みは家族に渡すプレゼントだった。

「どんなプレゼントを買おうか？クォンさんは何か買ってきたか？とても頭が痛いことだね。お金がいるし、買っていかないわけにもいかないから。」

帰国を控えて、各自忙しかった。もちろんうれしいだけではない。恐れと不安もあったが、ほとんどの人たちが、西ドイツで得た経験と人生の知恵を元手

に、新しい人生を夢見ている。もしかしたら、それがお金より大きくて大切な財産かもしれない。新しい技術と機械に対する見識や、外国で仕事をしてきたという自負心、ドイツ語を上手に話すという事実、もちろんそれらもあるが、最も大きな収穫は、今後どんなことがあっても、生きていくことができる、という自信であろう。誰でも敬遠する鉱山労働者としての経験を通じて苦痛と忍耐を味わったから、運命を切り開いていく勇気は誰よりも負けないだろう。

私が西ドイツで鉱夫として過ごしたことは、苛酷な人生体験であったと思う。もうどんな所に行っても、何の仕事をしても、私にはできないことがないという気がする。どんな苦痛もこらえることができて、必ず成功できる自信がある。だが、帰国日が近づけば近づくほど、複雑な気分であった。

第２の西ドイツ生活

帰国を控えて、簡単な持ち物だけをいくつか残し、残りの荷物を家に送ったら、万感胸に迫る思いが去来した。

心はすでに故郷に行っていたが、私は、まだ進路に対して迷っていた。ひとまず故郷へ戻ろうか、こちらに残って何か新しいことをすべきか？

「クォンさん、ここに残って、私たちとともに過ごして、勉強してはどうですか？」西ドイツにきて三年目、友人の女子学生アストリトのお母さんのローズマリー夫人が、私に西ドイツ留学を薦めた。彼女はオーストリア出身で、大卒のインテリであった。彼女は、私を実子のように扱い、私も継母のように従った。進路を決定できなくてぐずぐずする私を見て、ローズマリー夫人は西ドイツ滞留を薦めたが、私は何とも言えなかった。それもそのはず、西ドイツに残るということは、気持ちだけでは難しかったからだ。

まず、西ドイツ滞留延長許可を受けなければならなかったし、そのためには雇用契約書が必要だった。そして、大学に入学するには、登録料が必要だった。ドイツ語の勉強をきちんとしたというけれど、果たして大学に入る能力が備わっているのか、私の心は複雑に思い悩んだ。私は、山積した問題を解決す

る能力がなく、西ドイツに残りまた勉強したい、という気持ちはあっても、さまざまな問題を解くことはできなかった。

帰国日が近づくと、泣きだしたかった。ローズマリー夫人の提案は感謝したが、彼女が私の人生の責任を負うことはできない。残念な気持ちで、涙だけが限りなく流れた。

故郷へ帰るか、残って他の道を探すか、葛藤は続いたが、鉱山勤務が終わる頃には結局ソウル行飛行機チケットを買ってしまった。私は他の鉱夫らと合って、デュッセルドルフ空港へ出発して、そして西ドイツ留学を完全にあきらめて韓国行のボーディングパスを受け取った。ところが、ローズマリー夫人と娘アストリトが空港までついてきて、私を止めた。「クォンさん！このように帰ってはいけません。もう一度考えてみなさい。どうせ苦労するのなら、何か果実を得なければならないと思いませんか？今韓国へ帰ることもできますが、勉強をして帰れば、もっと幸せな日が待っているでしょう。大変でも、がまんしなさい。私たちがいるじゃないですか？」私はローズマリー夫人をぼんやり見つめた。そしてアストリトを振り返った。私たち三人の目には涙がいっぱいだった。待っていた同僚は、尋常でない雰囲気を見て、私を置いて、先にタラップを踏んで行ってしまった。

結局、私はその日、飛行機に乗らなかった。何の準備もせず、西ドイツに残ることを決めてしまったのだ。ローズマリー夫人とアストリトの手を払うことができず、私は思わず西ドイツに座り込んでしまったのだ。

韓国の家族は、帰るといっていた私が、何の予告もなしに、韓国には戻らないとは、どれくらい当惑して残念だろうか？突然悲しみがこみあげた。何の持ちものもなしで、一人ぼっちで異国の地に投げだされたのだ。血縁との対面ができず、再び空港を出ていく私の足取りは重かった。

ローズマリー夫人は私の手を固く握り、私たちは何も言わずにローズマリー夫人の家に戻った。家に帰ると、涙がとまらなかった。その後10日間、私は身じろぎもせず、ローズマリー夫人の家で横になっていた。三年間の鉱山生活の

虚しさと、帰郷での挫折で、体と心があまりにも痛かった。第２の西ドイツ生活に適応するまでは、しばらく時間がかかった。

この日もし故郷行の飛行機に乗ったなら、私の運命はどのように変ったのだろうか？故郷で農作業か、商売をしているかもしれない。また、何かになっただろうか？恐らく大学教授にはならなかったはずだ。

（翻訳者追記）

その後、彼はアーヘン教員大学教師範大学にローズマリー夫人の援助を受けて進学し、苦学しながら無事学位をとった。さらに看護学を勉強していた韓国人女子留学生と知り合い、結婚した。卒業後、西ドイツに居住する韓国の子供たちのために、西ドイツで最初の、週末にだけ開くハングル学校を二つ設立した。1979年２月、西ドイツで教育学博士学位を取得後、帰国して故郷の全北大学校に、西ドイツ博士学位取得者として教育学の教授に就任した。